

不斷に何んかの新らしい研究主題を探し求める。時にはまた、顕微鏡を覗いてゐることもある。

註一 *Oubret, le Crapaud.*

註二 彼れが必要な場合、顕微鏡を以つて探究したのは、全然午後に限られてゐる。それは光線の工合がよ
いからで、人爲的照明は彼れには知られてゐなかつた。

彼れの後妻に出来た子供達は成長して今や用意周到な助手となり、本ものの協力者となつてゐる。彼れの不在の時などは、何んか現に始められてゐる觀察を、代はる／＼に張り番をする。そして當番の歩哨は恰度よい時分に彼れを呼んで、どんな詳細も失はれないやうにする。或ひはまた、實驗室の鐵網の籠の中や、庭の灌木の中で、時にはうんざりするほど緩慢な歴史の變移を、たゞの一つたりとも彼れに見逃させないやうにする。それに、彼れは自分を活氣づけてゐる情熱を、そのまゝ家の者共へも感染させるのだ。だから一家を擧げて、殆んどが彼れ自身のやうに興味を覺えて來るのである。

夕餉の後には家族打ち揃ふて、女郎蜘蛛が精巧無比の幾何學をもつて、仙女の薔薇形の裝飾を作る仕事を眺めたり、さもなくば、玻璃戸の外に吊さつてゐる硝子籠を角燈に照らして、さ、そ、共の

呈する不思議な光景や、その異常な習性を見物する。

それから彼れは、以前オランチュで他處の人々のために行つたことを、今、自分の子供等のためにやる。即ち、木曜と日曜とを除いては、毎日午後二時から四時まで子供等のために、講義をしてやるのである。また彼等に讀ませるために、色んな面白い物語も作る。此の家庭は時として彼れの性急に亂されることもあるのだが、皆んな一緒になる斯うした教場へ、母親自身も出席する。彼れは總のついた鞭を振つて嚇したり、黒板を振り廻したりすることもある。よしんば彼れの愛情が、大して形に表はれないにしても——よしんば彼れが愛撫したり接吻したりすることは餘りないにしても、こゝろの中では彼等を熱愛し、彼等を吾がものにししようと云ふ熱望を持つてゐる。そして何時か彼等と別れなければならぬことを思ふては、彼れは堪へがたい惜別の情を禁じ得ないのであつた。

註一 一九〇〇年、一月六日、息エミールへの手紙。

「わしは子供等のために、簡単な化學の講義を始めようとしてゐる。呼吸作用のやうなちよいとした事

柄が分る程度のものだ。つまり彼等の小博物學の一章さ。明日は一大事、酸素のお話だ。それでわしは例の小さな「薬局へ」上つて行く。數年この方うちやつて置いたので、可成り損じてゐる。わし達が以前オランダでやつた事を、今またセリニヤンでやらうと云ふのだ。」

近々來訪すると云つて寄越したドウラクウルへ、彼れはまた斯う書いてゐる。

「あんたがお出でになれば分ることだが、わしは昔の職業を丸で止めつちまひたくもないので、子供等の勉強を見てやつてゐる。そして辛抱強く、色々なことを訊いても見るが、阿呆な奴等は決して返事するでもなし、なか／＼骨折り甲斐もないやうなものだ。が、智識の窓が少しづつ開けて行くあどけない小僧等、それからもつと仇氣なくて、そして色々なことを吾々に考へさせる蟲けら——この二つのものこそは、生活の辛酸の中にあつてさへも、わしを悦ばして呉れる。未來の暗い心懸りさへないならば、わしはこれ以上何んにも望むことはない。孤獨などはわしにとつて、何んでもありはせぬ。たとひわしには人間との交際がなくとも、家庭とのそれがある。蟲けらとのそれがある。蟲けらと來た日には、毎日わしに新しいことを教へて呉れるのだ。あんたの隠れ家に於ても雜事の心配から遠ざかり、日々の憂きことに對して同様の憤ひのあらんことを切望する。あんたに

は植物がある。それは勿論興味のあることだ。が、打ち明けて云へば、わしには植物よりも動物の方がよい。それは一層直接に吾々に話しかけるから。」(ドウラクウルへ。一八九七年、十月十四日)

彼れは、さうは云ふものの、植物に對して絶えず興味を持つてゐた。それは單に、秋も末になつて、昆蟲が休みに這入る時ばかりではない。彼れは球果菌科の原始的な小植物にも矢張り熱中してゐる。それはアヴィニヨンの中學校の碌でもない顯微鏡で研究を始め、そして後年デュリュイの計らひで、デヌマ氏から立派な機械を送られてから、オランダで於いてそれらの描寫を續けたのであつた。しかしその他にも、凡ゆる隠花植物は、極めて小さい菌類から「セリニヤンの林を敷きつめてゐる」でつかい茸に至るまで、凡て彼れの心を不思議に惹きつけた。それは彼れにとつて一の新しい世界だつた。實際専門家たちにさへも、それはあまり知られてゐなかつた。而かも斯うした菌類の富は實に消滅し易く、その儘ではとても保存の出來ないことを見てとつた彼れは、洋紅と印度藍とを色々な使つて全く獨創的な彩色法を發見し、そしてそれらの儂ない形態を寫し止めて、さながらの姿を七百枚に近い素晴らしいアルバムに收めた。それには南部地方の種類は悉く、驚嘆すべき眞實さを以つて、極めて微妙なその色調と、極めて精緻なその色合とが、すべて如實に再現せ

られてゐる。

註一 ドウラクウルへの手紙。一八八九年、九月四日。

「橄欖樹帯の種は殆んど氣づかれてゐないやうだ。で、わしは此の研究をもつとくやつて行かう。」

註二 ドウラクウルへの手紙。一八八五年、十月八日。

「わしは手に這入るのを片端から描いては色をつけてゐる。もう大きなものが一冊出来た。若しも一編に菌學研究をやる事が出来るならば、それは随分あなたの役にも立つてあらう。……わしは斯うした研究に没頭してゐる。それがちつとは生活の苦しみを忘れさせても呉れる……わしはありふれた菌、菌草料に取りかゝつた。これもまた新世界で學者達には知られてゐない。あの人は一般に北の人々で、橄欖樹帯の所産については、まあ素人だね。わしが發見したものの大半は、誰れの著作にも出てゐないやうだ。此處にも球果菌の場合と同じやうに、うんと爲すべきことがある。」

同人に宛てて、一八八六年、九月四日、斯う書いてゐる。

「連日の雨もやつと晴れた。林からは菌の香がぶん／＼して来る。これから二ヶ月、蠶筆を持ってせつせと働くと云はんばかり。しばたけとはらたけとは、やがてわしの卓子の上に行列をなし、わしの實驗室が一杯になるであらう。」

所謂「大きな一冊」は、フアブルに依つて蒐集せられたものの中の眞珠であつて、今日アルマの小博物館に納められてゐる。

アルバムに載つてゐる菌類と云へば、はらたけ、クラートル (Clathres)、ユシヨウの林には寔に豊富なあの奇妙な茸、粗毛織の頭巾を被つた腹の太いしばたけ、眞紅の大紅茸、箒茸、朱色な聖體盒を想はせる赤初茸、それからコプラン (Coprin) などである。此のコプランなどは、ひよろ長いその柄の上で、息のやうに軽い有るか無きかの微風にも揺らぐのだ。そして探るが早いか見てゐるうちに溶けて了ふ。その腐つた血のやうな黒い汁が繪の具に用ひられて、此の茸が生々と描かれてゐる。

家の中にあつてさへも、彼れは常に彼れの永久のフェルト帽を被ぶり、冥想に耽つて殆んどものを云はぬ。彼れは一言と雖もその目的を持つべきであると信じ、たゞの一語と雖もその意味、その重みを吟味した上でなければ用ひないのだつた。だから此家では沈黙は一つの掟となつて、時には多少重苦しい感じもしたが、然し食事の折りにも彼れを繞るもので、それを犯さうとする者はなかつた。そんな時に聞えるものと云へば、ひそ／＼した囁き、フルシエットの皿に當る響、迷ひ込んだ蜂のぶん／＼云ふ音、若しくは蠅の飛び廻る音ぐらゐなものだつた。

これに反して友人を食卓に迎へた時などは、彼れは何んと云ふ晴れやかな顔をしたことか。そして夫人はにこ／＼しながら何や彼やと歡待の心盡しをした。實際彼れの歡待ぶりたるや、随分歲月が経つてからでさへも、ご馳走になつた人達は、その素晴らしい、時には全く獨特な獻立を想ひ出して嬉しく思ふ程である。彼れはずつと前からお客の喜びさうなものを、あれやこれやと腐心するのであつた。

註一 夫人は一九一二年の晩春に逝去した。

註二 フアブルが死んだ翌日、小學教員ジュリアンは、マリユス（もつと先を見よ）へ送つた感慨深い手紙の中で、彼等が「彼れに碩學な御相手をして戴いて、一緒に過した愉快な時のことをすつかり想ひ出してゐる。彼れは特に「カルナヴァル祭の最終日の、素敵な、あんなにも獨特な獻立」——「古代ローマ人の有名なコスス（*Cossus*）ある木蠹蟲の幼蟲」の料理もあつた獻立」を追想してゐる。

屢々訪ねて行つて、彼れの仕事の慰安となつたドウラクウルへ、彼れは斯う書き送つてゐる。

「やつて來たまへ。お待ちしてゐる。やつて來たまへ。出来るだけ早くね。そして出来るだけ長い間ゐられるやうに。あなたの御手紙を見て、家では皆んな大喜びだ。わしは大紅茸を風味して戴く

ために、人を採取に遣はした。此の茸で素敵なご馳走が出来ようとは、恐らくあなたも御存知なからう……」（ドウラクウルへ。一八八〇年、十月二十三日）

私は八月、此の村の祭日と、冬、ノエルの日とは殆んど決まりきつて彼れの宅を訪ねたのであるが、そんな時には彼れは全家族を引き連れて、門のところで出迎へて呉れた。そして門へ這入るや否や、美味しい茸の香がするのであつた。

彼れは萬事に質素であるが、食事などに至つても一切肉をば斥けて、専ら果物を取り、無花果か棗實、若しくは何んか他の季節の果物だけで食事をするのであつた。齒、胃、腸、いづれの點から見ても、人間は本來果食動物ではないか。或る種の食物は、眞に嫌ひと云ふよりも寧ろ感じから好かなかつた。膽料理（*Foie Gras*）などが即ちそれで、それはわざと肥らされた擧句に殺されるといふやうな、えらい目に會はされた家鴨を想はせるのだ。實際、それは餘りに高價な一口ではないか。その代り彼れは、濫い、舌觸りの荒いセリニヤンの地葡萄酒を、水も割らずに飲むのであつた。彼れは何處のどんな名産よりもそれを好いてゐた。

が、友人ポルドオヌが送つて呉れる葡萄酒、若しくはラム酒をちびり／＼とやつて「お腹を暖め」もした。三十年間といふもの、彼れはラム酒を殆んど毎日飲んだのであるが、それで彼れの健康が何うの斯うのと云ふことはなかつた。彼れはまた、美味しい料理——料理の上手下手を鑑賞することも出来た。實際あんな鋭敏な味覺の持主は少いだらう。彼れは特に他人に風味させるのが好きだつた。ヴァントウ山登りへ誘つた人々のために、彼れが指圖をして拵へさせたご馳走などは、即ちこれを語るものである。それは豪奢なものだつた。どれだけの壘が平げられ、どれだけのパンが截られたことか！「鹽漬のつやく／＼した」緑滴るオリヅ。「四角な臍肉と胡椒の粒とで模様がついて、さつと蓋微色を呈した」アルルの大腸詰。「最初の空腹を癒すために、大蒜をどつさり詰めて、込んだ」羊の焼肉。「臼齒を嬉しがらせる」ための鶏肉。カヴェイオン産の肉の白いムロン。それから橙色の肉のムロン。そして饗宴を首尾よく終るために、「山から採つて來たきだち、薄荷」で味をつけられた、風味が高く、喉元で溶けて了ふやうなヴァントウ山のフロマアヂユ。

然しながら、彼れの最大の好物は、何んと云つてもパイプである。彼れの所謂シコロウヌ(Chlor-John)なるブルーエールのパイプを、ひつきりなしに唾へてゐるが、直ぐと火を消やしては絶えず

つけなほすのだ。

彼れは傳統を重んじて、凡ての舊習慣を恭々しく守つてゐた。ノエルの前夜などには、アルマの食卓の上に、和蘭みつばの心、アマンドのヌウガ、蝸牛料理、咬るやうな香氣の七面鳥など、さうした天國の悅樂が供へられないこととはなかつた！そして「ノエルのパン」へ突き立てられた聖木——小さな柀は、星のやうな小さな花や、珊瑚のやうな色をした實を、その常緑の小枝の上に飾つて、不滅な大自然の復活を證してゐるのであつた。

想へば此の自然の奥底に溢れてゐる詩の、最も深刻な啓示と感じとを、私が生れて始めて受けたのは、實に彼れの食卓に於て、彼れの話を聞いたたり、何んでもないことを見たりしてである！

セリニヤンの人々は、彼れを誤解して、心中彼れをあまり尊重してはゐなかつた。本當を云へば、彼れは尠くも非常な變り者と思はれてゐた。幾度びとなく彼れは、畑の中で腹這ひをしたり、地べたへ尻をついたりして、蠅や何んかのやうな、誰れの興味も惹かない下等な蟲けらを、擴大鏡で覗いたりしてゐたではないか。

それに、彼れは村を通つたこともないのだから、他人に知られる筈がないではないか。たまく友人の小學教員シヤラツスを訪ねるために、村でも通ほつて行かうものならば、彼れの出現は一大事となつて、村中病にでもとつつかれたかのやうに、大した噂となつて了ふ。それ程彼れの姿は村人を驚愕せしめ、奇妙に思はせたのだ。(ルイ・シヤラツスから著者への手紙)

然しながら、機會あることに、彼れは自分の智識を凡ての人の役に立てた。そして稀にやつて來る巡禮者達に、眞の謙讓でも認められる場合には、さうした人達を鄭重に迎へるのであつた。勿論自己の優越を感じしめるやうな素振りには心して避けた。が、厚かましい連中や、五月蠅い奴輩になると、彼れは一見以つて街學者たり愚人たることを看破して、あの邪魔をせられた蝸牛が殻の中へ納まるやうに、彼れも自分を守つて打ち解けることは出來ず、彼等の前に黙々としてゐるか、時には遠慮會釋もなく彼等を追拂ふのであつた。

大學の教授達もやつて來て、彼等の教授綱目に關して彼れの意見を求め、或ひは難解の疑問に就いて教へを乞ふた。さうした時の彼れの説明は實に簡單明瞭で、論理整然、問題は釋然として氷解

するのであつた。そして質問者は、たゞ夫れ自己の不明と昏迷とに呆れるのであつた。

然しながら、外部から來る凡てを撥ねつけて、いつかな中へは入れまいとしてゐるかのやうな、彼れの門をくゞつた者は決して多くはない。そしてアルマの昵懇な人々と云へば、村の小學教員のローラン、ルイ・シヤラツス、後年にはジュリアン、それから盲人のマリユス・ギイグ位なもので、極めて僅かである。

此の最後のものは二十歳の時に明を失つた。そこでパンを儲けるために、彼れは椅子を拵らへたり、薬の詰めかへをしたりして、眼は見えず、貧乏で、随分惨めだつたにも拘はらず、内に幸福を抱いてゐた。

ファブルは此の賢い單純な男を、セリニヤンへ來た時に見つけた。フハヴィエも同時に發見せられたのであるが、この土着の男は陽氣な心榮えて、返答もおいそれと云つた風にきびくしてゐた。彼れはファブルを助けてアルマを開拓し、菜畑を作つたりして、きつい骨折り仕事に従つた。何しろこの土地は、未だ曾て開墾されたとのなき石だらけの荒地だつたのだ。

何んでも花類を面倒みることが、フハヴィエの役目だつた。此の新地主のフアブルは、實際大の花好きだつたのだ。時には珍しい鉢植の植物が、夏の間、住居の前の地壇へ入口の兩側からづつと並べられて、露天の玄關と云つた風のものになる。そしてフアブルは不斷に細心の注意を拂つて、それを見張るのだ。二人は同じ方言を話した。そして彼等の交はした言葉は同じ叡智から出て來るものだつた。何んとなれば、フハヴィエもフハヴィエなりに自然を愛し、その心底には藝術家の素質が潜んでゐたからである。夕べ、一日の仕事を終へてから、檜の丸太の燃えさかる臺所の爐の高い縁石に腰かけて、「彼れは彼れ獨特の美しい繪のやうな話振りで、昔軍人だつた頃の想ひ出をまさしく語り出す。すると、皆んなはすつかりそれに聴きとれて、不思議に宵が短かく思はれるのであつた。

この快活な氣さくな男は重寶な僕として、二年間と云ふもの鶴嘴で掘つたり、種を播いたり、草を掻つたり、鋤で耕つたりして力の限りを働いた。そして萬事がやゝ整つて、いよいよこれから先の仕事も略ぼ眼鼻がついた所で突然死んで了つた。そこで博物學者に指定せられた次の協力者が

マリユスである。そしてフアブルのために道具を備へ、装置を調べ、實驗の籠を按配し、若しくは彼れを助けて土を掘り返へしたり、彼れが熾烈な太陽の下で待ち伏せでもする時に、日傘で蔭を作つてやつたりすることは、皆マリユスの役目となつた。マリユスは眼こそ見えないが、主人とはすつくり氣持が合つて、フアブルが何んか作つたり工風したりする時などは、ぶる／＼顫へるほど情熱に燃えて、彼れが立ち會つてゐる出來事を恰かも肉眼で見るとかやうに、思念の眼を以つてつけて見る。そして感嘆に堪へない面持ちには、次第に内からの反映が明るく射すのであつた。

マリユスは、單に微妙な感性と、心眼を以つて見る力とを持つてゐたばかりではなく、音の正不正を確かに聴き分ける鋭敏な耳をも持つてゐた。彼れはセリニヤンの音樂隊に加入してゐて、大太鼓の役を受け持つてゐたが、その節を嚴重に守ることや、適宜に力を入れて打ちつけることや、恰度よい時にシンバルを響かしたりする點で、誰れ一人彼れに及ぶものはなかつた。

シヤラツスも二人に劣らない熱心な門人である。彼れは科學と一切の美しいものとを熱愛する。そして、骨ばかり折れて人には認められず、報酬も極めて少ない小學教員の職務にさへも、定に氣

高い心を以つて熱中する。彼れもマリユスと同じやうに「苦いパン」を食つてゐる。そしてフアブルは、彼等も自分のやうに辛酸を嘗めて来たところから、一としほ意氣投合するのを感じるのである。

彼れは次ぎの古諺を歌ふやうにして、幾度びか彼等へ繰り返へした。

人は山楂子の實のやうなもの——

お美味しいお酒となるためにや、

納屋の中で、藁の上で、

長い間熟さにやならぬ。

この慎ましやかな人達が持つて来る會話は、實に純朴そのもので、ひどく彼れの氣に入るのであつた。それは實際自然味が溢れてゐた上に、同情と明識とにも富んでゐた。毎週木曜と日曜との午後には、彼等は正確にアルマで過ごしにやつて来た。彼等は何時でも自由に出入が出来た。此家の

主人は何時何ん時でも、たとひそれが午前中の、仕事に熱中してゐて、人を寄せつけないあの怖ろしい時でさへも、彼等だけは喜んで迎へた。それは彼れのセナクル「彼れのアカデミー」のやうなものである。その朝書き出した新しい章を読んで聞かせたり、最近の發見を説明して聞かせたり、そして彼等が何んとか云つて呉れると、彼れは非常に嬉しく思ふ。斯うした「眩惑せる無智な輩」の意見を叩くことも、敢て何んとも思ひはしなかつた！

註一 ルイ・シャラツスから著者への手紙。

後年ジュリアンがマリユスへ何もかも打ちあけて、人の一生を香ぐはしくするに足りるさうした何んとも云へない頃の想ひ出を語つてゐる。彼れは何時も受けた單純で、同時に温かな應待や、アルマの愉快な散策や、實驗室の訪問や、何時も彼れがイの一番に読んで聞かせて貰つた原稿のことや、先生に伴れられて「禮拜堂を一巡りしよう」などと云つて出掛けたあの素晴らしい温室のことなどを、それからそれと想ひ起してゐる。それからまたコロニユ(Coronille)の花盛りを見て、フアブルが「アルマへ卵の黄味の雪が降つた」と云つたやうな、實に畫趣的な言葉や、また、玄關で來客と別れる際に、その日の會話の主要な點をかき撮んで云ひ添へる時に、彼れがきまつて用ひ

た言葉なども、あれやこれやと思ひ出してゐる。

註一 一九一五年、十月二十八日、ジュリヤンよりマリユスへの手紙。

尙ほまた、マリユスと同様に、音律や諧調をよく辨へてゐたシヤラツスは、同時にプロヴァンス語に精通したOC語保存主義者であつて、その用語から、獨特な語法、凡ゆる云ひ廻はしに至るまで、何もかも詳しく心得てゐた。だからファブルは彼れに、好んで此の方面のことを相談したり、何んか美しい詩句が見つかる、それを讀んで聞かせたり、或ひは彼れ自身が靈感を受けて作つた妙味のある田園詩を誦して聞かせたりするのであつた。實際詩を作ることは、彼れの快い一つの慰安で、そんな時には思ふ様幻想に耽けるのであつた。然しながら、さうした時でさへも、彼れは決して自然と云ふ堅實な地盤を離れはしなかつた。後にこれらの詩は敬虔な彼れの弟の手に依つて集められて、ウーブレト(Oubreto 詩集)の新鮮な花束となつた。さうした作詩の瞬間には、彼れの黒い眼が光輝に充ちて、身振りは表情に富み、そして情熱の籠つた顔は靈感に生動して眞に此の世のものと思はれず、事實一種の不可思議な變化をさへ來すのであつた。

時にはまた、夏の午後、蟬の鳴き聲が靜まる頃プラタアヌの樹蔭で、或ひは冬の日、戶外では緑杉を揺ぶる北風が咆え狂ふか、劇しい雨が窓硝子を打ちつける時、何時も客を迎へる一階の食堂の、薪が盛んに燃えてゐる煖爐を前にして、たま／＼來り加はる彼れの甥や姪や、尙ほ二三人の親密な人達に依つて、後には私さへが屢々加つて、何時もの小さい集ひは一としほ賑はうのであつた。さうした時には、彼れの妙想は自由自在に流れ出た。そして香味をつけられた葡萄酒をちび／＼味ひながら、彼れのにこやかな哲學や畫趣的な會話を玩味して、愉快で眞面目な幾時間かを過すことは、何んと云ふ得がたい悦びだつたか。さうした時の彼れの會話は古い格言、諺、逸話、若しくは痛烈な皮肉に充ち、經驗から得たやうな深い、正しい思想に織りなされるのであつた。

對話と朗讀とが交る／＼に行はれたさうした集ひの比類なき魅力を、私は何んと云ひ現はしたらいふことか。何んか時事、何んか雜報の一つもあれば、それが忽ち會話の端緒となるか、若しくはその地盤を切り開くことになつた。彼れは僅か數語で以つて、凡てを云ひ盡し、或る位置を描き出し、適切な表現を見出すのであつた。特に彼れがラングドックの郷土詩人ピヨ(Hippolyte Bigot 1825—1897 ニイムで生れた)の詩、ペランヂエの「惡魔の死」や「善良な神」、或ひはエソツプの寓話や、

彼れが「最も眞摯な、最も眞實な古代の畫家」と呼んでゐたエスキイルなどを原語で朗讀する時などは、何時でも來いと云つた風に、前縁のぐつと反り返つた大きなフェルト帽の下で、何んと云ふ光りに彼れの眼は輝いたことか！ 何んと云ふ靈感に彼れの手や腕は顫へたことか！

斯うした恍惚たらしめる「OC語狂の群れ」から歸つて、再び正氣な人間の渦卷きの中に這入りこむ度毎に、一切が私には平凡で、陋劣で、虚偽に充ちてゐるやうにしか思はれなかつた。ゲーテ以來、彼れほど廣汎な、彼れほど優れた會話をなし得た人は、曾つて他にあるかどうか。

例へばミストラルと較べると、何んたる優越さであるか！なるほどミストラルは、詩と云ふ排他的な領域に於てこそ無比で、ヴィルヂイルとホーマー以來吾々の空の下に現はれた、恐らく最大な詩人であらう。然しながら、科學、藝術、音樂——凡てに對して彼れの眼界は甚だ局限せられ、殆んど閉ざされてゐたではないか。

ドウラクウルが毎日送らして呉れるル・タン紙を讀んでゐるので、彼れは凡ゆる方面のことを知り、その感想を述べもした。例へば飛行機のやうな或る近代的發明に關しても、彼れはその疑ひを

隠しはしない。さうした發明の新奇さが、一寸彼れには面喰はせのもので、要するに實用範圍が極めて狭いもののやうに思はれたのだ。

それに所謂「進歩」なるものを彼れは痛烈に罵倒した。それはヴァントウ山の腹に道路を通じて傷を負はせ、自動車ゆだの蹂躪に委ね、更に頂上に宿屋を建ててその額を織し、以つて——彼れのむくつけき言葉を借りて云へば——「糞をひつかけた」のだ。

斯んな風に、極めて新しい出來事もアルマの奥へ忍び込んで、その會話に豊富な材料を供給するのであつた。

彼れは或る時、何時もの親密な集ひの翌日、彼れの甥に宛てて次ぎのやうに書いてゐる。

「……今度セリニヤンの集ひを開いたら、近頃出た戯曲のテオドラ (Theodora) で大流行となつた、あのジュステイニアンのことを一つ話さうではないか。あんたはあの阿呆らしい亭主と、あの怖ろしい淫賣婦との話を知つてゐるか。恐らく完全にと云ふ譯ではなからう。それを此の次ぎに、わしが話さうと思ふのだ……」

註一 一八八五年、一月四日、甥のアントナン・ファブルへの手紙。

彼れがジュステイニアンやテオドラの史實を知つたのは、特にその愛好してゐたギボンの著書に依つてである。

たゞ一つ、セリニヤンの集ひに於て殆んど語られなかつたものは、それは政治であつた。而かもファブルは、全く珍妙なことではあるが、一年間村會へ出席するやうに任命せられたこともあるのだ！ 然しながら、彼れの出席した最初の會議は甚だしく騷擾を極め、議員連は盛んに罵り合つた。それが彼れをして、もう永久に政治なるものに愛想をつかさせたのであつた。

此の百姓の息子、下層階級の生れで、百姓を以つて終始した彼れ——嘗ては教師として若い人々に、科學によつて解放さるべき事を鼓吹したこともある彼れ——さうした彼れであつてみれば、勿論民主主義でないためには、餘りにその不正を痛感して居つたに違ひない。

然しながら、彼れは何よりもフランス人たる誇りを持つてゐた。彼れの明敏な魂は、曾てその靈感を他所に求めたことはなく、フランスの古い大家、即ちデュヴルやレオミュール、及び昔の郷土作家達以外からは、たゞの一度も影響を受けたことはなかつたのだ。そして彼れは、後年は必ず

もさうでもなかつたのであるが、最初のうちはいゝ加減な名目の下に輸入せられる外國印の思想に對して、本能的に嫌惡を感じたのであつた。

彼れこそは最も純粹な意味での共和主義者であつて、ルイ十四世に對してさへ尊敬の念は毛頭持たなかつた。此の大王も、彼れの言葉に従へば、「大食ひの製糞屋」であり、また至純な人間ラ・フオンテエヌを認めることさへも出来ない男だつたのだ。

ナポレオン三世に關しては、一と度その宮廷に伺候したこともあるので、寧ろ同情ある想ひ出を持つてゐた。そして時には當時を懐しむ面持ちで、彼れのことを回想することもあつた。然しながら、帝政や、それを出現せしめた所謂「強盜の仕業」をば、彼れは心から憎んでゐた。

共和政布告の日には、彼れは數人の生徒を引連れて、アヴィニヨンの街頭に姿を見せた。彼れは突然の政變を驚きながらも悦び、戦争（普佛）が齎らした不測の結果を心地よがつた。それにしても第二帝政が、デュリュイの斡旋によつて、彼れに出来るだけの事をして呉れたといふことは、彼れもさすがに嬉れしく思ふてゐた。帝政が倒れた頃には、彼れは未だ全著作の約十分の一ばかりを著してゐたに過ぎぬ。それにしても彼れは既に尊重せられ、價值を認められ、敘勳もされてゐた。

彼れの著はした教科書は、その種のものの中で第一位を占め、當時殆んど唯一の公認教科書であつたのだ。

彼れのそのやうに自由で、昂然たる獨立心に充ちた精神は、始めから一切の屈從に對する先天的の敵である。だから平等と共産とを主張する國家社會主義は、彼れの眼から見れば帝政同様戰慄すべきものだつた。

自然もまた彼れに、その永遠の教訓を不斷に示してゐるではないか——

「平等！ 何んと云ふ素晴らしい政治の看板だ！ が、それだけのことではないか。一體何處にあるのか、その平等なるものは？ 吾々の社會に於て、力、健康、智力、勞働の傾向、先見の明、その他繁榮の重大な素因となる諸々の才能を、全々等しく持つてゐる者が、唯だの二人でもあるであらうか……一音では諧調をなさぬ。不同音が必要である。不協音さへも、そのさら／＼した響きを以つて、却つて和絃の快味を深めるのだ。人間社會もこれと同じく種々雑多な相異が綜合されて、始めて調和が取れるのである。」(昆蟲記)

また共產主義と來ては、何んと云ふ他愛もないユートピア、何んと云ふ頼りないイリユージョン

であるか！ 寧ろ、自然が如何なる條件の下に、如何なる苦しい犠牲を拂つて、それを實現してゐるかを見るがよい。

蜜蜂にあつては、「その二萬匹が母たることを斷念し、生涯の獨身を誓ふて、唯だ一人の母の大家族を養育するのである。」

蟻、胡蜂、白蟻などにあつては、「幾千も幾千もが生殖不能の状態にあつて、僅か二三の性的に恵まれたものの榮えない補助者となるのである。」

そして若しかしたら、諸君は人間をしてあの行列毛蟲の生活——身邊をめぐる松葉を食つて、不平もこぼさず限りなく同じ小徑を歩み、到る所常に富裕な、怠惰な、そして安逸無爲な生を見出すところの、あの行列毛蟲の生活をさせようと云ふのであるか。凡てが同じ身長、同じ體力、同じ才能を持つて、何んらの獨創もない。「同じ熱心さを以つて甲がすることを乙もする。そして優りもしなければ劣りもしない。」そのかはり、「そこには性がない。従つて愛もない。」悦びのための仕事もなく、家庭も愛も除かれるやうな社會は、一體どんなものであらうか。生の魅力をなすところのものが、そこでは凡て永遠に消滅するのではなからうか。

たとひ如何に今日の社會が不完全であるにしても、またその運命が如何に神祕であるにしても、

フアブルが未來の人類の優秀を垣間見るのは、社會主義を通してではない。何んとなれば、彼れにとつて、眞の人類は未だ存在してゐないのだ。否、それは途上にあつて、除々に前進してゐる。そして彼れは心底から斯うした進化を信ぜんとするのである。今日の人類は、坂を攀ち登りつゝあるところの、未だものになつてゐない粗拙に過ぎぬ。そしてその生活は、「狂人によつてもされ、酔ひどれ役者によつて演じられる芝居」を見せてゐる。偉大な詩人ウイル(Wiil)の此の意味深い言葉を、彼れは云はば吾がものやうにして屢々口にし、且つ晩年の手帳の一冊には、常住心に銘すべき箴言として第一頁に書き誌したのであつた。

彼れはまた、懲罰の権利や、罪過の取り締り方などに關しても、極めて廣々とした意見を持つてゐた。エツクスで辯護士をしてゐた甥のアントナン・フアブルが、何んか微罪に問はれた「可愛さうな少年水夫」を釋放することが出来た時、彼れはその成功を心から祝したのであつた。彼れは斯う書いてゐる。

「あんたは、奴を惡の道から救つたと云ふものだ。懲治監へ打ち込まれでもしたら、奴、きつと無

頼漢か何んかになつて了つただらうが、お蔭で有用な、正直な働き手になるかも知れぬ。彼奴に代つて、わしから有り難う。わしの考へでは、社會は罰すべきものではなくて、豫防すべきものである。皆んな自衛しようではないか。そして、他人を蹂躪しまゐではないか……わしは今度のやうな成功を、澤山にせられんことを望む。」

更に心から死刑を憎んで、それが一日も早くフランスの法典から取り除かれんことを希望もした。人を殺すよりも、寧ろ犯罪と云ふ疾患の原因を質し、その救濟方を研究すべきであると云つてゐる。

人口減退と云ふ悲痛な問題に呻いてゐる人達は、だ、い、こ、こ、が、ね、の、教、訓、に、耳、を、傾、け、る、が、よ、い、食、べ、物、の、豊、富、な、時、に、は、平、生、の、三、倍、も、子、供、を、産、み、つ、け、る。だが食料の不足な時には、きつかり食ふだけのものしか有しない都會勞働者、若しくは、持てば持つほど欲しがらブルヂョワの眞似をして、不足をしては大變と云ふので産兒を制限し、屢々一匹しか産まぬ。」(昆蟲記)

だから一切の儚ない幻影、虚偽の幸福を追ふことは止めて、一層純朴な趣味、一層質素な習慣に立ち歸るがよい。多くの不自然な必要を解脱するがよい。賢い憧れを持った太古の節制に浸るがよい。豊富の源たる此の野に歸るがよい！ 永久の慈母たる此の大地へ歸るがよい！ さもなくば——と此の偉大な觀察者は豫言して云ふ。——さもなくば、何時か人間は——此の「どえらい勢で神様か何んかのやうな真似をしてゐる」人間は、遂ひには餘りに強烈な過度の文明に疲れ、調子が亂れ、果ては中毒して消滅するであらう。その時彼れよりも先きに此の地球へやつて來た昆蟲どもが、彼れよりも長生きをして、彼れのゐなくなつた世界でその歌を歌ひ續けるであらう……

ジャン・ジャック以來、曾て「自然に歸れ」と云ふ叫びが、これ程まで雄辯に叫ばれたことはない。ファブルの念頭にあつたところのものは、強者、生れながらにして或る天職を持つた人々、偉大なる使命の意識に燃えてゐる人々ではない。それは寧ろあらゆる田舎生れの人々——家庭の愛、日日の勤勞、心の平和などを以つて唯一の重大事となし、そして他に求むることのない人々である。

蓋し、彼れもまた一個の強者ではあるが、それにしても彼れは彼れをその生地結びつけてゐる絆を断ち切らうとはしなかつたのだ。恰度オスミ(Osmia 蜜蜂の一種)がその生家の記憶を執拗に持つてゐるやうに、彼れが幼時を過ごした懐かしい村は、曾つて彼れの記憶から消えたことはない。そして長い間彼れに付き纏ふてゐた切なる願ひは、即ち其處へ彼れの骨を埋めることだつた。幾度彼れは其處へ思ひを走らしたことか。他處では見つからないやうな平穩を、彼れは其處に探し求めたのだ。そして彼れの魂は、昔あんなにも愛したあの石、あの木、あの岩などの間を戀々として彷徨ひ歩いた。それらのものもまた、彼れを認めて呉れるだらうと思ふたのだつた。

それにしてもある日——それは泉の囁きの他には何んの亂すものもない靜かな夕べ、プラタアヌの下に於てであつた——私は此の傳記へ記しつけるために、此の點に關する思ひの程をきつぱりと云つて貰ふやうに頼んだ。その時彼れは思ひ切つて、彼れの舊い憧憬も人には打ち明けない心の底で、今は愛しいセリニヤンのために掻き消されたと云ふことを私に打ち明けた。實際、彼れの齡が進むにつれて、よしんばその荒涼たる郷土——あの石だらけなルウエルグをば少しも忘れないにしても、彼れは幾多の新らしい絆に依つて、日増しにセリニヤン近傍の野や山に結び附けられるのを

感じたのであつた。あゝ！ 幾度び彼れの心は此の野と此の山との中で、發見の強烈な歡喜を以つて搏つたことか。そして最後に彼れが埋葬せられんことを欲したのも、實に彼れが美しい蜂や懐かしい金龜子の間で、無上の悦びを味はつた此の土地なのだ。

フアブルは、本當のところ、よく人が思ひ誤るやうな人間嫌ひではない。彼れは婦人達をも懇ろにもてなして、機嫌よくその仲間に這入る。また教養ある人々の會話が與へるところの、あのしみりとした、心を引き立たせるやうな印象に敏感なことも、決して人後に落ちはせぬ。

彼れはまた、其處に人生が誠實に再現せられてゐるならば、矢張り藝術をも愛好する。

こんな譯で、色々とまやかしの金ぴかを以つて飾り立てられた演劇は、彼れには實際の拙劣な變形としか思はれなかつた。それは彼れがアジヤシオに於て、ノルマ (Norma) の上演を見物した時以來のことである。その時、月は何んか透明な丸いもので表はされ、後ろから細紐の端に吊されたランテルヌを以つて照らされ、そしてそれが左右に搖れるにつれて、或ひは透明な月が皎々と輝いたり或ひは暗く陰つたりする仕掛けとなつてゐた。もうそれだけで、彼れは芝居も歌劇も永へにう

んざりして了つた。後者の音樂の狂燥なリズムに對して、あの歌ひ手のぎこちない姿勢——それが彼れに一種不合理な、非常識な想ひ出を残したのであつた。

それにしても、彼れは音樂を熱愛することは止めぬ。これも繪と同じやうに、彼れは師に就いて學んだのではなかつた。然しながら、彼れは極めて高級な演奏よりも、寧ろ純朴な歌謡、野笛の吹き、牧笛の哀れな響きなどを好むのだ。(昆蟲記) 家族の居間となつてゐて、家具と云へば四つの舊式な色の褪せたものしかない、奥まつた頗る質素な部屋の中で、彼れはよく見すばらしいオルガンで小曲を試みるのであつた。それは獨特の樂譜と技術とを以つて、彼れ自身の作曲したものだつた。彼れは獨特な方法によつて水彩畫を描いたやうに、また作曲もしたのである。そして音樂を會つて正式に學んだことがないにも拘はらず、諧調の主要な原理をそれからそれと、巧みに發見したのであつた。

「彼れは時として、一聯の不協和絃を掻き鳴らした。それが實に巧妙に整理せられ、必然的に調整せられて、最後の大團圓——窮極の素晴らしい完全和絃の仕上りを豫感させた。」彼れもさすがに

モオリス・ロリナのやうに、詩の明確にすることの出来ない、若しくは完成することの出来ないところのものが、音楽に依つて補足せられ、強調せられ、擴大せられるべきであると考へた。だから彼は朔風ビクスをして笑はせ、歌はせ、吼へさせたのだ。だから彼は松風の響きを摸倣したのだ。また、蟬の鳴聲、蜥蜴の陶酔、墓の歩きぶり、蚊の小笛の音、蟋蟀の嘆き、金龜子の唸り、若しくは蜻蛉の羽風に煽られた葦の戦まぎなど、自然の多くの韻律を再現しようとしたのである。

註一 シヤラツスから著者への手紙。

日中は多忙の餘り、讀書の暇もなかつた。で、彼は夜、その償ひをつけた。夕方早くから、裸かな壁に裸かな板瓦の床の、庭に面した小さい部屋に引込んで、綠色サーヂの帷のかゝつた極く低い寢臺に横たはつたまゝ、彼は屢々讀書に夜を更かすのであつた。

未來の哲學者達は、幾多の新らしい理論や獨創的な思想を、彼れの著作の中から汲みとるであらう。それにも拘はらず此の哲人は、哲學者との交際をば一切御免を蒙むつてゐた。彼等の學説を蔑すんで、寧ろ慕地に事實へ突進した。デアキンの「種の起原」さへも、彼はちよいと覗いて見た

丈けである。彼れにとつては、それは我慢の出来ない倦怠を催さすものだつた。これに反して、彼れは古代の哲學者等に惚れ込んだ。彼れは青年時代にも壯年時代にも、大いに古典に親しんだと云ふわけではなかつたので、晩年特に「昔のよいお書物」を愛惜して措かなかつたのだ。

斯うした所から、彼れは當時の多くの人々とは反對に、古典研究を以つて必要缺くべからざるものとなし、科學は古典の敵ではなくて、實にその味方であると確信して居つた。彼れは就中ヴイルヂイルを愛好して、その影響が深く彼れに沁み入つてゐたと云つてもよい。然しながら、彼れはリユクレエスをば好まなかつた。そして彼れを「胡桃の殻の上に」世界を再建しようとしてゐる近代唯物論者の原型と見做したのであつた。彼れはよく斯う云つた——此奴と來た日には、疑ふことは知らないし、云ひ脱れには抜け目がないし、てんで知らないことを知らないと云はない奴だ！

彼れはまたラブレエを深く理解してゐた。實際ラブレエは常に彼れの「友」だつた。そしてよく彼れの話頭に上つた。更にラ・フォンテエヌの行き方は、實に不思議なくらゐ彼れのそれと似通つてゐる。事實、彼れは此の詩人の眞の門人とも云ふべきである。然しながら、彼れの特に讚美したのは、ラ・フォンテエヌのいかにも藝術家らしい素質、自然味、感激、用語、若しくは場面の拵ら

へ方などであつて、畫家としての、また觀察家としてのラ・フォンテヌをば、少しも價値のないものとした。彼れの言葉によると、「蟲けらのことなどは、何んにも分らない」人なのだ。

ルソオのものでは非常に清新な印象に富んだ「植物學に關する書翰」と云ふのを、彼れは譽めちぎつてゐた。それには勿論文學者としてのルソオは出てゐないが、「その道の玄人」としては判然と現はれてゐる。またペランヂエの獨立心、觀察の精神、深遠な叡智、技巧の自由、本質的な、そして輕妙で親しみよい感激などは、彼れの特に愛したものである。更にまた、かのミシュレエ！彼れは曾つて實際の事物に手を觸れたことはなく、科學の實際に就いても一向に知らないものであるが、然しながら、あの直觀！あの宏大な愛！それは實に驚くべきもので、彼れの靈妙な筆力、事物を浮き彫りにする力、幻影をまさしくと描き出す筆致など、その背景の貧弱さにも拘はらず、ファブルを恍惚たらしめるのであつた。實際此の二人はよく似通つてゐる。ミシュレエも亦、自然の祕密を聽く麗はしい役目によく適してゐた。そして二人とも、その心の響きは同じだつた。

註一 Michelet 1798—1874 フランスの偉大なる歴史家。彼れには「昆蟲」「鳥」などと云ふ素晴らしい著作もある。(譯者)

註二 セリニヤンに於ける會話。

私は以上彼れの愛する人々に就いて述べて來た。そこで彼れの愛しない人々に就いても云つて悪いわけではない。彼れのとても堪らなかつたのはラシーヌである。モリエールも七やかましい術語などは大嫌ひであつてみれば、少くとも此の點では大眼に見られさうなものだつたが、それにしてもファブルには殆んど顧みられなかつた。最後にビュフォンであるが、その餘りに流麗な文章、絢爛な文體、概括的な、個性のない、甚だ漠然たる描寫、いゝ加減な調査、受け賣りの智識などに對して、彼れは明らかに嫌惡を示してゐた。

註一 Buffon, 1707—1788 フランスの博物學者。

黄昏時

あの静寂の中で、彼れは何んたる勞苦を續けてゐることか！ 何故なら、彼れは未だなか／＼その仕事が終わつたとは思はないのだ。

彼れは斯うドウラクウルに書いてゐる。

「各自が、めい／＼の畝を耕つて行く。昆蟲の生物學が私の仕事となつた。どうしてだかは分らない。他のものを選ぶ暇もないので、私はそれに頭を突込んでゐる。若しかしたら、私は其所で私の砂粒——此の人間の蟻塚の中で、私の原子を手に入れることが出来るかも知れぬ。かうした偏つた嗜好に就いて、私は自らを叱責することがある。他の事は別としても、何しろそれはお錢を儲けて、私を待ち伏せしてゐる貧困を脱れる役には立つて呉れぬ。が、どうにも致し方がない。蟲けらが私を驅つて行く。此の冬中、私は松の行列毛蟲に話しをさせた。随分色んな奇妙なことを語つて呉れ

た。そして今、私は螻蛄、蟋蟀、いぶきぎす、その他多くのものと頭を突き合はさうとしてゐる。何時まで経つたつて、終りつこなしだ。マテユサレム(九六九歳まで生きたユダヤの家長)だつたとしても、これでお了ひと云ふことはなからう……」(一八九六年、五月二十五日、ドウラクウルへ)

実験の對象は、温室さへも充たしてしまつてゐる。そこにあつた植物は取り拂はれて、昆蟲実験室の附屬室みいたいなものになつたのだ。

七十三歳と云ふ老境に入りながら、彼れは殆んど知られない此の不思議な世界の歴史を、未だ粗描きしたに過ぎないものやうに感ずる。

一九〇三年に、彼れは弟へ斯う打ち明けてゐる。「掘つて行けば行く程、掘られる價值のある無盡藏な脈へ、鶴嘴を突き立てたやうに思はれるのだ。」

殆んど同時に、同じ瞬間に、どれだけの研究が企てられたことか！ どれだけの觀察が試みられたことか！ 彼れの實驗室は、實驗の對象で一杯に満たされてゐる。「わしはまだ長生きでもするかのやうに(そして彼れは八十歳になつた)、あくまでも小さい蟲けらの研究を續けてゐる。」

註一 一九〇三年、六月十八日、弟へ。恰度此の時、「昆蟲記」第八卷が出版された。そして第九卷が始まつ

てゐた。

静寂の中の仕事は、彼れにとつて、ます／＼唯一の可能な生活のやうに思はれて来る。そして彼れは他のどんな生活をも、想像することだに出来ぬ。

「外の世界は、殆んど私の氣を惹かぬ。小供等と一所に、時々、森の中へ鶉の歌を聴きに行くので澤山だ。都會などは思ふてさへも癪の種だ。もうこれから先き、わしには都會人のやうに、あんな小さい籠の中で暮らすことは出来ないだらう。わしはお了ひまで野人といふ譯だ。」(一九〇三年、六月十八日、弟へ)

仕事は彼れにとつて、これまで以上に本當の有機作用みいたいなもの、生存の必然的條件となつた。

「休息なんか失せやがれ。機械が働く限り、生涯を正しく過ごさうと思ふものにとつて、仕事に及ぶものがあるか。」

それは凡ての生き物にとつて、終生の大法則で、且つ「蟲けらにせよ、人間にせよ、惱めるもの無上の慰籍」ではないか。

何故、富を造つた者が、そして子もなく親戚もなく、明日死ななければならぬ者が、それでも自分一個のために働き続けるか。自分にも隣人にも利する所なき無用の仕事を爲して、その日と力とを費やし続けるか。

それをくだ蜂 (Haltens) に訊ねてみるがい。彼は母となることが出来なくなつても、尙ほ力の有らん限り働くために、その城市の番人となるではないか。

それをオスミ (Osmia)、葉切り蜂 (Megachile)、毛梳き蜂 (Anthidium) に訊ねてみるがい。彼等は「母としての目的はなく、たゞ労働の楽しみのために、生命が失くなつて了ふまで彼等の活動力を無駄な仕事に費やす。」ではないか。

それを蜜蜂に訊ねてみるがい。彼は仕事が無くなると、思ひ沈んで遺溺なく、やがて無聊の餘り死ぬではないか。また、カリコドマに訊ねてみるがい。彼は「通りすがりのものに蹂み蹴られようと、いつかなその仕事を止さない」ではないか。

最後に、それを全自然に訊ねてみるがい。それは休息も停止も知りはず。そしてゲエテの意味深長な言葉の通り、それはぐずぐずして運動を中止する一切のものへ詛ひをかけるではないか！

だから、人も蟲けらも働かねばならぬ。「それは靜かに眠るためである——蛆蟲や毛蟲は蝶や蛾への變形を準備するあの昏睡を。また吾々は、生命を一新するために先づこれを溶解するあの無上の睡眠を。」

依つて以つて吾々が自然の上に獨創の跡を刻みつけるところの、あの靈妙な直觀を吾々の中に培ふために、吾々は働かねばならぬ。吾々の悲痛な、而かも甲斐ある勞苦に依つて、森羅萬象の全的調和に一臂の力を貸すために、即ち吾々は神に連なり、その創造に參與し、以つて大地に不思議を満たして光彩を添へるために働かねばならぬ。

さあ、死を忘れろ！ 墓の彼方までも前進せ！ 何時までも斃れるな！

彼れの弟が殆んど相接いで夫人と長女とを失つた時、彼れにはかう云ふ慰めの言葉しかなかつた。「お前にふり懸つた最近の不幸に就いて、わしは何んのお悔みもしなかつたが、悪くは取つて呉れるな。家族の死と云ふ苦い味はわしも度々味つてゐる。だから、さうした慰藉などの何んにもなら

ない事が分つてゐるので、最良の友たるお前にそんな事を云はうとは思はなかつたのだ。たゞ時だけだ、かうした傷を少しは直して呉れるのは。それから仕事。さあ！ お互、やつて行ける限りせつせと働かうではないか。こんなよい氣附け薬が他にあるだらうか。」（一八九八年、十月十日、弟へ。）

かうした勞働の讚美は、彼れの青年時代の手紙に屢々繰り返へされてゐる。が、それはまた、無類無双な「昆蟲記」を堂々と終る最後の巻の、最後の言葉でもある——「*Laboremus*」。

彼れの勇氣も彼れの精力も、老齡に依つて殺がれはしない。彼れは殆んど八十七歳になつても、依然として同じ熱心さ、永久に生きて行くかのやうな熱意を以つて仕事を續行する。

たとひ彼れの體力が去るにしても、たとひ彼れの脚が震へるにしても、彼れの腦は依然として侵かさず、彼れの眼も「玉葉の青蟲」と「螢」との研究が終るまでは、少しも衰弱しない。これらの最後の研究は、彼れの思想が突如として若返り、幾多の獨創的研究が今また新たに始まらんとしてゐるかの如く思はせた。

實際、蟲けらの世界は彼れにとつて、ますます眼まぐるほしい驚異に充ちてゐるやうに思はれた。そして昆蟲は、「殆んど氣づかれない、殆んど諳のやうな新らしい領域へ」彼れを導き込んだ。

螢は百里香の枝にちつと止まつて、夕べ、その小さい明りを夏の夜の清々しさの中に灯す。その明りは何を意味するだらうか。かうした燐光の神祕を、いかに説明すべきだらうか。此の緩慢な燃焼、「此の平生よりも劇しい呼吸のやうなもの」は、一體どうした事か。そして「あゝした白い、軟かい光明を與へる所の」酸化し得るものは何んであるか。それは「婚禮を祝し、胞子を發散せしめるために」橄欖樹のはらたけが灯す燐と同じやうな、戀の燐であらうか。それにしても幼蟲にとつて、明りを灯すことが何んの益に立つのだらうか。何故、卵が未だ卵巢の奥深く閉ぢ縮つてゐながら、既に明るく光るのか。

「はらたけのやわらかい光に依つて、視力に關する吾々の智識が目茶苦茶にされる。それは光線を屈曲させない。それはレンズを通して物像を作らない。それは寫眞の種板に作用しない。」（一九〇八年、三月三十日、著者への手紙）

然しながら、奇蹟がそれで盡きては居らぬ。「或る菌——クラートル (*Cathin*) は、少しも燐光の

形跡が無いにも拘はらず、殆んど太陽の光線と同じやうに、強く寫眞の種板に作用する。暗いクラートルは、明るいのは、たけに出来ない藝當をやつてゐる……私はもう一つの菌——Phallus impudicusでも同じ結果を得た。注目すべきことは、その何づれも臭い、堪へられない匂ひを持つてゐることである。これを以つて見ると、果して匂ひの發散物と明りの發散物との間には、何等かの微かな類似があるのではなからうか。私はこれを研究しなければならぬ。」（一九〇八年、三月三十日、著者への手紙）

そして、若しも螢の照燈がはらたけの光りを思はせるならば、クラートルも一つの昆蟲を思はせる。それは大くぢやくてふである。

暗い部屋の中へ入れて置くと、此の壯麗な蝶は幻燈のやうな放射光を發する。それは恐らく間歇的であり、婚禮の季節のためにのみ取つて置かれるもので、吾々には見えないが、かうした夜の兒らにのみ認められる暗號であり、彼等はこれによつて互に通信し、闇の中で呼び合ひ、語り合ふものなのだ……（未發表の實驗）

斯くの如きはつい此の間まで、この偉大なる勞働者が専心してゐた興味深い研究主題である——

隠れた性質、有機物の發光力、燐光、明り……宇宙のエロス（戀の神）の生きた象徴。

然しながら、セリニヤンへ居を構へた始めの頃の果敢ない繁榮は、既に已に困窮と變つてゐた。その豊富な時期について、殆んど赤貧の時期がやつて來てゐた。彼れの教科書は驚異的となつて、収入は千六百フランばかりに登り、そしてそれが兩三年間續いたのであるが、今やそれは流行しなくなつてゐる。既に風向きが變つたのだ。第一、類似の本が盛んに現はれた。それらは新しい教育のプログラムに準じてはゐるが、多くの場合ファブルの著作を眞似たものであるだけに、彼れに取つては一層打撃なのだ。それに教科書の採用は全く委員の氣紛ぐれと、當事者の選擇とに據るので、ファブルの教科書はだん／＼と賣れなくなつた。

それに世間は、反宗教運動の熱に浮かされてゐた。ところがファブルはその教科書の中で、屢々唯神論的なことを云つてゐるので、多くの視學官が、それを所謂瑕として許さなかつたのである。

ファブルの教科書が酷く彼等の信用を落したのは、特に一八九四年からである。一八九九年一月二十七日に、彼れは彼れの出版者へ次のやうに書いてゐる。

「凡ゆる努力にも拘はらず、私は曾て無かつた程未來が不安になつてしまつた。私の教科書が、今また二つ失くならうとしてゐるではないか。こりや、全難船の魁けちやあるまいか……むしやくしやして来る。」(シャルル・ドゥラグラアヴへの手紙)

景氣が絶えず悪くなる一方なので、間もなく彼れは出版者へ頼んで、交互計算から——「彼れの貧弱な資本から」、更に云ひ換へれば、ます／＼逼迫して來さうな極めて近い未來に備へるために、「辛抱して手を着けないで來た」「云ふにも足らない貯蓄」から、いくらかの補助金を送つて貰つた。「眞に遺憾ながら、今年の收支を償はせるために、私はあなたにお預けしてある幾錢かを引き出さなけりやならなくなつた。本當を云へば、それは私のもではない。未だ若くて自分では生活を儲けることの出來ない、私の子供三人のものなのです。」(前と同じ手紙)

彼れはテナアル(Thénard)によつて創設せられた科學者の救濟會に訴へようと考へた。此の救濟會は、老齡に達して尙ほ且つ物質的困難に悩んでゐる科學者のために設けられたものである。「私には救濟を請ふ資格が無いだらうか。私は有るやうに思ふ。今の博物學者のうちでも、私の名前は一番よく外國に(國內でも)知られてゐるものの一つである。私は本能の方面で、これまで殆んど

感づかれなかつた新しい脈を拓いた。私は大家達に、今レオミユールだの、眞似の出來ない觀察者だの、昆蟲學者の王だのと、色々な名前をつけられた。私はまた、随分色々な讃辭や表彰を受けた。さうした私が、失望と貧困との中で終らうとしてゐるのだ。その日／＼のパンの心配に悩まされることなしに、力のあらん限り、かうした置はしい研究を續けて行くことが出來るならば、私はどんなに嬉しからう。此の問題たるや、幾ら汲んでも盡きることはない。第八卷の原稿が出來ました。今私は第九卷を準備してゐる。私が何うにか斯うにか樂になりさへすれば、次ぎをどし／＼上げます。何も偉さうなことを云ふのではないが、實際、今後何時になつたら第二の今レオミユールが出て、私がしたやうに、情熱と無私無慾の念とを以つてその探究を行うことか。これが科學者の救濟會へ、私が云つてやればやれる理由です。」(一九〇二年、十二月十四日、ドゥラグラアヴへの手紙)

且つまた、彼れは貯蓄の出來るやうな人ではなかつた。絶えず多くの負擔を脊負はなければならなかつた上に、最初の夫人は費用には頗る無關心で、いくらか締りなくさへもあつたのだ……かくて一方、自由教育家としての彼れの位置が危くなつたと同時に、他方、彼れの「昆蟲記」は

殆んど幻想的な利得しか齎さぬ。何んとなれば、當時衆目をあつめてゐた案山子達に較ぶれば、彼れは殆んど知られてゐなかつたからである。

「レオミュールのやうな大家でさへ誇りとした研究も、わしをば宿なしにするであらう。屹度さうだ。だが、少くともわしは、わしの砂粒を残さう。わしがその歴史家となつた小さい蟲けらの世界で、若しも眞理に對する不斷の探究が勇氣を與へて呉れなかつたならば、私はもう夙うの昔に、苦も樂もなくなつてゐたことだらう。わしは思想を蓄めながら、それでどうにか斯うにか生命を繼いでゐる。」(一九〇〇年、二月四日、弟へ)

それにしても彼れの名聲は、よほど前から國境を越えてゐた。彼れは一八八七年以來、フランス學士院團の通信員であり、ブテイ・ドルモア賞金 (Prix Petit Dornoy) の受賞者である。彼れは外國の最も有名なアカデミイや、ヨーロッパの主な都會の昆蟲學會の一員となつてゐる。しかしながら、彼れの名聲はさうしたアカデミイや、本職の生物學者、及び哲學者の限られた範圍を出てはゐなす。

註一 一八八一年に始めて科學院が、彼れをアガツシス (Agassiz) と共に推薦した。

「私はマルセイユ大學の友人から聞いた不思議な話をひよつと思ひ出した。その話に依ると、科學院が米國のアガツシスと共に私を通信員にしたといふことだ。此の話が、どれほど眞實だらうか。何んかそれに就いて御存じですか。私としてみれば、そんなことは、土耳其王の政務と同じこと、全く他處のことですが。」(一八八一年、七月八日、ドウラクウルへ)

註二 此の賞金は一八八九年に彼れに與へられた。その金額は一千フランである。そしてそれは學士院團の賞金中、最も大なる賞金の一つである。

それにしても狭い範圍で味はれ、尊重せられたさうした環境に於てさへも、彼れはいまだ完全には知られてゐない。大いに嘆賞せられ、その卓越せる見識と天才とに悦んで讃辭は呈されるにしても、彼れが顯示した此の生命の森林にどんな力が含まれてゐるか、それは未だ殆んど豫感せられなない。實際彼れの著作は、多産な力が長く隠されてゐて、且つ遠くからでなければ輝いて見えないやうな著作である。然るに、實に多くの駁辯は、いきなり大評判となつて、そして間もなく忘却の中に消えるではないか。

註一 かうした現象は、必ずしもファブルの場合に限つたものではない。バストウルの大発見も、當時の多

くの人に全く無視せられたやうだ。例へば一八七二年に出版せられた「宇宙、無限大と無限小」の著者
プウシエ (Pouchet) の如きも、その著の中で、顕微鏡によつて顯はされた凡ゆる不思議を述べてゐな
がら、バストウルの名前さへ云つてない。

新らしい巻は二年若しくは三年毎に、長い間愛しまれてから始めて世間へ送り出される。その度
毎に昆蟲の歴史に驚くべき章、動物心理學の素晴らしい研究が付け加へられた。然しながら、フア
ブルの名聲は常に限られてゐた。即ち公衆の中には何等の好奇心をも呼び起さず、普遍的な冷淡の
中に止まつて、完全に認められはしなかつた。

詰り彼れの著作はたゞ少數の選ばれた人達の興味を惹くだけである。さうした人達は、實際、彼
れの著作を餓ゑたるもの如くにして手に入れ、驚嘆と歡喜とを以つて讀む。それは哲學者の好奇
心を刺戟し、科學者や探究者の好奇心を覺まし、また、あちらこちらで幾人かに天職を自覺さして
ゐるにしても、それに依つて最も魅せられたのは、文學者や詩人であらう。それはロスタンの慰安
とさへもなつてゐる。即ちフアブルの著作には、云はば藥の效能があつて、重患からの恢復期にあ

るロスタンへ、靈妙な精神上の休養を齎してゐる。左様、さうした人々が遠い國へ亡命するとし
て、いよ／＼永久に去るに當り、僅かに十冊の本しか持つて行けないならば、フアブルの著作こそ
は、彼等が何うしても携帶せざるにゐないその一冊であらう。

註一 Edmond Rostand 1868—1918 フランスの有名な詩人にして劇作家。「フアブルの著作は、随分長い
恢復期の間、私の此の上もない歡喜でした。」(一九一〇年、四月七日、著者への手紙)

然しながら、此の著作には若干の否定出来ない缺點もあつた。第一、書名には何んにも咬る様な
ものは無い。それは一見したところ、何んか七難かしい、肩の凝る、餘りに専門的な研究を想はせ
て、寧ろ買ひ手を引込ませた。而かも斯うした非一般的書名の下に、豈計らんや、異常な仙境が展
開せられ、その物語りは獨り専門家のためのみでなく、事實に於て萬人に向けられてゐようとは！
それに始めの幾巻は、出来るだけ費用のかゝらないやうに、經濟的に印刷せられたので、其所に
は少しの魅力もありはしなかつた。讀者の助けとなるやうな極めて單純なスケッチも、昆蟲の大き
さなり、輪郭なり、相貌なりを直接に思ひ浮ばせるやうな、極めて僅かの裝飾もなかつたのだ。た
とひそれは如何に貧弱にしても、一スケッチが、屢々長い骨の折れる描寫よりも効果があらうでは

ないか。

こんな譯で、フアブル自らをはじめ、著作の賣れ行きに對して餘り大きな希望を持つてはゐなかつたのだ。當時、ちつちやい蟲けらに興味を持つてゐる人は、眞に寥々たるものだつた。然かのみならず、こんな眞面目に取る價値もなく、金にもならない子供囁しのお譚」のために、彼れがあたら貴重な時間——と度去つては再び歸らない此の時を空費してゐると云つて、彼れを非難したのさへもある！ だから、綿密なスケッチを作つたりして、尙ほさら多くの貴重な時間を割くわけには行かなかつたのではあるまいか。それに、さうした立派なスケッチは、恐らく出版者が贅澤として、敢て挿入しなかつたかも知れぬ。否、フアブル自身がそれを承知しなかつたであらう。

蓋し、此の凡てに對して興味を持った研究者には、それ位なことは譯もなく出來たのだ。つまり彼れは言葉を以つてあんなにもよく描いた凡ての生き物を、やはり繪筆を以つて忠實に表すことは容易だつたのだ。彼れの中には作家があつたばかりでなく、また秀でた畫家もあつたのである。彼れは發掘し、そして玄人の考古學者らしい手腕を以つて、巧みに原形を恢復した有史以前の陶器の模様を、實に何んとも云へない正確さを以つて、水彩畫に模寫してゐるではないか。彼れはまた、

かうした水彩畫家の手腕を以つて、橄欖樹帯の菌類の凡ゆる不思議な特徴を、さながらに描寫してゐるではないか。

・彼れの著作の中の不十分な、若しくは甚だしく不正確な、而かも多くの人が以て満足してゐるやうな「吝な圖」は、彼れにとつては實に「うんざりする」もので、本文の嚴しい正確さを全然裏切るものだつた。

註一 シャルル・ドウラグラアヴへの手紙。日附なし。

彼れの友人ドウヴィヤリオは、數回に互つて、彼れが何うしても著作に圖を入れようとしないうを説服しようとした。彼れは石版刷を奨めさへもした。「挿繪がないと云ふことは、昆蟲學者でない讀者にとつて、眞に遺憾なことであります。」(一八八三年、三月二十一日——ドウヴィヤリオからフアブルへ送つた手紙)

後になつて、かうした缺陷は、彼れの息ボオルの巧みな寫眞によつて充たされた。彼れは昆蟲が何んな様子をしてゐる時に、何んな瞬間に撮影すべきものであるかを教へた。さうした寫眞は勿論貴重ではあるが、然しながら、寧ろ形や色と共に蟲けらの根本的な特徴や、凡ゆる生き／＼した相貌をも浮き彫りする所の麗はしいスケッチの方が、何れ程よかつたことであらう！ それは美術の

畑である。然しながら、大藝術家の素質を持つてゐたフアブルは、此の地盤に於てもオウデユボ
ン(Audubon)の幻術のやうな手腕と争ふことが出来たのだ。

こんな譯で、人々はあゝした著作を見棄てた。そして自然の物語、碌でもない出来損ひが盛んに
流行して、やんやと囃し立てられた。

フアブルは赤貧に近い窮状へ、ますます深く陥つた。そしてとう／＼全く忘れられた。反進化論
者なる彼れは、「時代遅れ」だつたのだ。そして百科辭典なども殆んど彼れのことには云はなかつた。
當時尙ほ牛耳を執つてゐたラマルク主義者、ダアキン主義者らは、彼れを無視した。その門を叩く
者は最早たゞの一人もなかつた。そして「當時文明世界の持つてゐた最高にして至純な光榮の一、」
最大なる博物學者の一人、近代的意味の詩人で、眞に此の名に値ひする最も素晴らしい詩人」であ
る彼れは、暗がりと放棄との中で老いてゐた。

註一 一九〇九年、十一月十七日、メテラルリンクから著者への手紙。

彼れが六十有餘年來住んでゐるヴォクリユウズ縣でさへも——彼れが二十年間住んだアヴィニョ
ン市でさへも、彼れは殆んど知られなかつた。そして、彼れに接近することが出来、私も頻りに促
した知事ベルウデイ氏は、「こんなにも優れた人が、こんなにも知られないでゐる」ことに愕き、且
つ甚だ遺憾に思つたほどだ。何しろ彼れの周圍でさへも、彼れの名を知つてゐるものは殆んどゐな
うのだ！

註一 Bellendy 一九〇九年、九月二十九日、私への手紙。

「あゝした偉人、あゝした科學者、あゝしたフランス文學の大家が、こんなにも知られてゐないのは私
もほんたうに悲しく思ひます。二年前、サユネエル賞金 (Prix Gœgen) があの方に與へられた際、私は
私を繞る幾らかの人達へ、あの方のことを話しました。その中でもあの方の名前を知つてゐるものは殆
んどありませんでした……」

然しながら、それが何んだ！ 彼れは落膽しはしない。彼れは單に、體力が衰へて行くし、これ
まで絶えず凡ゆる悲しみと凡ゆる困難との慰安となつて呉れた、あの研究を繼續する事が出来なく
なりはしないかと云ふ不安を懷くだけだ。彼れはアルマの砂利の上に、辛うじて其のろい疲れた

歩みを運ぶ。然しながら、歳や不遇やをもとせず、彼れは雄々しくもその八十七歳に堪へる。そして一方彼れの眼光の焔は依然として眞理に對する情熱を表はし、他方彼れの皮肉を帯びた小さきみな素振り、單純な着物、極めて思ひ上らない人と爲りなどが、世間の出來事、光榮の金びか……！凡ゆる人生の馬鹿騒ぎに對する無頓着を十分に語つてゐる。

それにしても、二三里離れた他の村では、もう一人の偉大な百姓、プロヴァンスの歌人、愛と悦びと、野の勞働と古への信仰との詩人——ミストラルが讚辭と崇拜との中で彼れの素晴らしい生存の、類ひなき經過を辿つてゐた。

彼れは譯もなく「最初の微笑みが、曙よりも柔らかな」光榮を知つたのであつた。そしてそれは、もう五十年間と云ふもの彼れを去りはしなかつた。

彼れの青年期を搖がした寵愛の風は、滿帆を張つて彼れを突き進めてゐた。彼れは姿を見せさへすれば、直ちに取り巻かれ、喝采せられ、慶賀せられ、媚びられた。そして群集は、恰かも彼れの名の意味する北風に揺られる高い絲杉の黒い針葉のやうに顫動するのであつた。彼れも亦本質に於

て素朴な人だつた。そしてフアブルと同じやうに——此の偉大な博物學者がその郷土の蟬の歌、埃だらけな橄欖樹、藪及び桎などから離れることの出來なかつたやうに、ミストラルもその郷土から去ることが出來なかつた。そして彼れも亦都會から遠く、靜かな村の中で、同じ平野の地平線と百里香の薫る岡とを友として、矢張り小さい家の中で單純な、叡智に充ちた生活をしてゐた。

然しながら、世評には無頓着な、否、人の呈する讚辭にさへも冷淡なフアブルとは異つて、彼れはその名聲を嘯むために、何んと云ふ配慮をしたことか！ 毎朝、世界の凡ゆる隅から届く手紙の香を聴きながら、無數の讚美者に得も云はれぬ書箋を以つて、一々正確に返事をするために、彼れは殆んど半日を捧げてゐた。

註一 一九二二年、五月二十四日、Félix Aohard から著者への手紙。

「私は幾度かちよいとしたりした手紙を書いて讀みの祝辭を述べたが、何時でも返事をもらつたことはありません。」

目指す所は甚だ異なるが、二人とも等しく田園の趣味、大自然の廣濶に對する愛好を持つてゐた。そして、セリニヤンの隱者を此のプロヴァンスのリユクレエス(Lucraee)とすれば、ミストラルは

そのヴィルヂイル (Virgile) だつた。後者はその美しい豊富な想像のプリズムと、その調和した生活の樂觀主義とを透して、特に單純な、幸福な生活を見てゐた。然るにフアブルは、その研究してゐた陰慘な現實の蔭に、生命力の殘忍な縫れ合ひ、ぞつとする様な悲劇しか認めなかつた。實際、彼れの悲觀主義たるや、身の毛もよだつやうなものだつた。彼れには全地球が此の世ながらの地獄に見えた。「さうした惱みは何うしたことか。さうした苦しみは何うしたことか——(アヴェバリー卿は「人生の快樂」を書いた。何時人生の苦惱が書かれるだらうか)——此の怖ろしい人生に、美と價値とを與へるものは、それは探究のみである。」

註一 Lord Avebury (Sir John Lubbock 英國の有名な博物學者)

こんな風に平行に進んで交叉しないのは、實に彼等の生活ばかりではなく、また兩者の著作もさうだつた。そして、寄る年波にもめけず、常に若々しいミストラルが、メエヤアヌに於て優遇と榮譽とに取り捲かれてゐる間に、貧しい偉大なフアブルはセリニヤンに於て、その輝きのない、暗い、長い旅を終へようとしてゐた。

彼れの生活難はますます甚だしくなつて、家族を養ふことさへ困難だつた。そして彼れの極めて僅かな収入と云へば、兩三年この方デュネエル賞金と云ふ名目の下に、學士院團の好意に依つて與へられてゐた三千フランの寔に心細い年金位のものでつた。

とうとう彼れの生活状態は、二進も三進も動きが取れなくなつた。そこで、彼れはプロヴァンスの凡ゆる茸を本物のやうな色彩を以つて自然大に描寫して來たところの、あの素晴らしい水彩畫譜を博物館にでも賣る決心をした。

彼れは此の事に就いて、一九〇八年の春、ミストラルの訪問を受けた後に彼れへ手紙を書いてゐる。ミレイユ (Mireille) の著者が彼れを訪問したのは、それが最初でまた最後であつた。彼れはその時から云つた。「あの世——〇〇語仲間の樂園でお會ひする前に、私は尠くも此の世であなたを知らないで死にたくはないと思つたのです。」

註一 一九〇八年五月二十四日、ミストラルから私への手紙。

「昨日、私は妻と共にセリニヤンの大科學者をお訪ねしました。彼れも私どもと同じやうに、此の會見を非常に悦びました。」

然しながら、此の訪問の眞動機は、何もそんなに遠い天上のことではなかつた。ミストラルは、あの素晴らしい標本の話しを聞いてゐた。彼れは特にそれを見にやつて來たのである。恐らく彼れの富んだ崇拜者にこれを買はして、彼れの博物館——あの著し Museum Arlaten (アル博物館)へ寄附させようと云ふ下心だつた。アル市に在る此の博物館は、同地方の寶の一つとなつてゐるが、さすがに大藝術家らしい趣味を以つて、其處へミストラルが舊プロヴァンスの凡ゆる魅力、飾り、興味、及び詩となつてゐたものを蒐めたのであつた。

フアブルは次ぎに掲ぐる手紙を以つて、ミストラルに答へた。それを此處に掲ぐることの出来るのは、大詩人の好意によるものである。

「私は私の碌でもない茸の水彩畫を賣らうなどは、曾て夢にも思ひませんでした……が、どうなることか……」

「此の事について、私はあなたの高貴な御人格に力を得、何も彼も打ち明けて申し上げたいと思ひます。近年私は私の教科書の所産を以つて、切り詰めた生活をして参りました。が、今日では教育の風向きがぐるりと變つて、私の教科書はもう賣れなくなりました。で、私はこれまで以上に、そ

の日その日の恐ろしいパンの問題と闘つて居ります。若しもあなたとあなたのお力添へで、私の詰らない畫譜が何うにか私の役に立つならば、勿論苦しいですが、それを手離すことに致しません。何んとなく、私は此の皮膚が引き掻ぎられるやうです。だつて、私は私自身のために、それよりも私の家族のために、私の昆蟲の研究のために、たとひどんなにやくざものになつてゐても、尙ほ且つ此の老耄れの皮膚に執着してゐるのです。私はどうしても此の研究は續けて行きたいと思ひます。これから先き長い間、こんなことをやつて見ようなどと思ふ人が有るかどうか。それほど此の仕事は情け無いのです……」

註一 一九〇八年、七月四日、ミストラルへの手紙。

ミストラルは結局マリアニ (Mariani) と云ふ特志家を見出した。此の人は水彩畫譜に對してフアブルへ一萬フランを呈供した。ところが妙なことには、景氣が變つて博物學者はその畫譜を保存することになつた。

詩人の勸告によつて、知事ベルウデイ氏は大臣を促し、結局「科學獎勵として」僅かではあるが千フランの救助金を出さした。最後に彼れはヴォウクリュウズ縣會に於て事情を訴へ、聲に際り最

大名譽であるばかりでなく、國民全體の最大の光榮の一でもあるこの偉人へ、それ相應な、靜かな老境を保證するために、尠くもその一部を貢獻すべきことを要求した。彼れの立派な主張は貫徹して、縣會はフアブルへ「彼れの卓越せる科學と、彼れの極端な質朴とに對して、同縣人が公けに敬意を表するために」年五百フランの補助金を與へることにした。

既にその前の縣會に於て、矢張りベルウデイ氏の動議によつて、縣の農業化學試驗場の器械道具が一切フアブルに一任されたのであつた。それはもう何んの役にも立たず、廢止せられようとしてゐたものである。

今や時の重荷が彼れの上を壓し、その努力も事實に於て終つてゐるのに、人の世に常なる皮肉に依つて、單に必要なものばかりではなく、また餘計なものさへが——何もかも同時に彼れに持ち上つて来る！

そこで、或る日、あの繊巧な道具が一切セリニヤンへ運ばれた。然しながら、研究の性質上、生涯さうしたものを持つたことが無いのみか、常にさうしたものの有用さをも疑つてゐたフアブルに取つて、それは無用の長物だつた。彼れには些々たる晴雨計一つ無かつたのだ。そして彼れの貧し

い實驗室の唯一の高價な道具であつて、時には彼れが覗いて見た立派な顯微鏡も、それは自分で購ふたものではなくて、以前デュリュイが化學者デヌマを通して彼れに送つた貴重な贈物である。實際彼れには單純な擴大鏡で十分だつた。彼れは何處かでかう書いてゐる。「生命の祕密は、單純な、その時々工夫せられる金のかゝらない方法で得らるべきである。私の本能研究の中で、最も價値あるもののために、何を犠牲にしてゐるか。時間だけである。特に忍耐だけである。」

恰度その頃である。彼れが放棄せられてゐるのを久しい間痛ましく思ふてゐた私は「フアブルの日」を祝ひ、さうして彼れを知らない公衆へ、同時に彼れの名と彼れの著書とを知らしめたい希望を持つた。

それは或る人々の反對に遭つて、最初仕甲斐のない寔に困難な努力ではあつたが、私は幾ヶ月もの間ひそかに献身した。科學の小止みなき進歩を促進するために歩みを續けてゐた人達が、果して彼れを残して既に遠く前衛へ辿り着いたのか。果してさうした人達が、一瞬たりとも振り返つてみる氣になるだらうか。私は此の機會に於て、當時の人々がフアブルをどんな風に考へたか、それを

見てみよう。

第一、昆蟲學者の中でも最も偉大なるものに對する頌讚に、昆蟲學者にして参加を承諾したものは殆んど無し。

それはベエコン (Bacon) の所謂「生けるものの中に、死骸をのみ求めてゐる」人々の多くが、フアブルをもつて一個の想像に富んだ人としか見てゐなかつたからである。果然彼等自身は美を懐かしむ心を持たず、これを眞の中に看取することも出来ない所から、彼れが科學の領域へ文學を持ち込んだことを恐らく信念よりも嫉妬を以つて非難するのであつた。

また他の昆蟲學者は、フアブルには獨創がなく、他人の發見をさながら自分の發見のやうに云つてゐると稱して非難した。

然しながら、先づ何よりも先きに、彼れは殆んど讀書しなかつたので、彼れの研究の對象が、既に誰れかに手をつけられてゐようなどは、多くの場合少しも知らないものであつた。實際、彼れは或る主題に關して探究を始むるか、若しくはそれを終るために、先づ以つてそれ關して既に發表せられてゐるものを知らなければならぬやうな人ではなかつた。そして彼れは參考書で氣を採み

はしなかつた。

或る時、彼れは體軀矮小に關する研究を始め、既にその結論を垣間見てゐたが、彼れは鐵網の籠の中で隨意に作つた小さい金龜子や、なむぐり、を私に見せて、突然、さうした現象に關する私の意見を求められた。私は偶々此の方面に關して、幾年かの間多くの生理學者の研究に注意もしてゐたし、此所ぞとばかり、彼れのために研究資料を集めてやることにした。最初フアブルはそれを熱心に望むやうだつた。然るに少しく經つて私がそれを持つて行つた時、彼れはきつぱりと利用することを拒んだ。

且つまた、よしんば彼れが斯くくの昆蟲に關して、何等の根本的な發見をしてゐないとしても、彼れも亦自ら研究して、何んかしら新しいものを以つてそれらを飾り、若しくは眞に生命の息吹を以つて生かしてゐるとせば、そんなことは問題にならないではないか。

尙ほまた、自らの眼を以つて彼れの云つてゐる所のものを見ようとした人達は、彼れに誤謬のあることを非難した。實際、彼れは時として斷片的な透視を以つて満足しては居らないか。比較研究するために、若しくは尙ほ繰り返へして見るために、彼れは再び歸つて來ない機會を待ちあぐんで、

少しく燥急な普遍化をやつては居らないか。然しながら、彼れの觀察は實に手に入つた、實に確かなものであつてみれば、さうした缺點がたとひ如何に多くあらうとも、決してがやく云はれるほど重大なものではない。そして、若しもこれを機會ある度毎に訂正するならば、尙ほ更ら科學のためには有益となるではないか。

分類上の若干の誤謬——彼れのスカラベ・サクレは、それが兄弟の様に似てゐるスカラベウス・ピウス (Scarabeus pius) に過ぎず、また彼れの黄翅のあな蜂は事實に於てスフェックス・マクシロス (Spheg maxillosus) であるにしても、それにどれほどの重大さがあるか！

また、不思議が時として彼れの想像したほど驚歎すべきものでないにしても——例へばあな蜂類の奇蹟的な本能とせられたものも、事實に於て兩敵手の間に於ける争鬪の機械的事情、大きさの相違、及び勝利者の角性の甲冑と犠牲の神経系統とが、旨く侵し侵されるやうに出来てゐることなどの結果に過ぎないにしても、それが何んだ！ 不思議が不思議でなくなるか。

更に或る者は、「自分等と異なる意見を發表した」と云ふので彼れを非難した。本當を云へば、彼れは信心深い人達の中に、疑ひの眼を以つて見られてゐた。それが若し宗教裁判の當時だつたならば、

彼れは必ずや異端呼ばはりやをされたことであらう。さうかと思ふと彼れはまた、宗教を信じない人によつても憎まれてゐた。彼れの高遠な精神主義が、彼等の氣に喰はなかつたのだ。恐らくこんな譯から、やがてファブルをやんやと賞讃する小學教員等さへも、當時多くは彼れを無視したのであらう。

實際ベルグソンの如く、ファブルに負ふてゐる所のものを知つてゐた人は、極めて稀だつた。ベルグソンは私へその感歎を洩して云つた。「ファブルを知つてゐるものは無い！ 何しろ世間ではやつと彼れを解し出した——やつと彼れを讀んでみようかと云ふ氣になり出したのだからね。」

それからアヴェバリー卿は、英國の底から喝采してゐた。その他、著名の數學者アンリ・ポアンカレ (Henri Poincaré) 大礦物學者ラクロア (Lacroix)、高潔な昆蟲學者ブヴィエ (Bouvier)、科學者ポール・マルシヤル (Paul Marchal) なども讃歎してゐた。然しながら、凡てのうちで最も情熱的なのは、ロスタン、ロマン・ロラン、メエテルリンク等であつた。

註一 Edmond Rostand 一九〇九年、十一月二十日、私への手紙。

「アンリ・ファブルを祝はうとする人々の間へ、あなたが私をも入れて下されたことに就いて、私はひ

どく感動するばかりでなく、それよりも、特に、非常に嬉しく思ひます。あなたの御盡力に對して私の名も何にかの役に立つだらうとお考へ下されたことを、深く感謝致します。「昆蟲記」は久しい前から私を此の感激に富んだ、深い、麗はしい天才に親しませて参りました。私は得も云はれない無数の時間を此の著作に与ふて居ります。私の一人の子息が、今進んでゐる方面を取るやうになつたのも、恐らく此の著作の御蔭であります。アンリ・ファブルへ敬意を表するために、幾多の歲月以來、その生命を著作の中に閉ぢ込めてゐる彼れの勤勉な退隱を、あなたは少時の間擾亂する敬虔な危険を冒すことになるにしても、それは哲人のやうに考へ、藝術家のやうに見、詩人のやうに感じ且つ表現する所の、此の偉大な科學者に對する天晴れな正義の行爲であります。」

註二 Romain Rolland 一九一〇年、一月七日、私への手紙。

「ジャン・アンリ・ファブル頌讚に参加せよとの仰せに私は何んとも申しやうのない悦びを感じます。彼れは私の最も讚美する一人であります。彼れの非凡な觀察の情熱的忍耐は、藝術と同じやうに私を恍惚とさせます。既に幾年以來、私は彼れの著作を読み、且つ愛して居ります。最近の休暇にも、私が旅へ持つて行つた三冊の本のうちで、二冊は彼れの「昆蟲記」でありました。私もあなた方の一人として戴けるならば、寔に有難い仕合せであります。」

註三 Maurice Maeterlinck より一九〇九年、十一月十七日、私への手紙。

「アンリ・ファブルの日を祝はうとする委員の間に、私の名を書き入れて下されたことを私は非常に嬉しく、且つ非常に光榮に存じます——實際、アンリ・ファブルは、今日文明世界が持つてゐる最高至純

の光榮の一、最も優秀な博物學者の一人、近代的意味の、最も靈妙なる眞の詩人であります。斯く、私が生涯の最も深い讚美の一つを云ひ表はす機會を下されたことが、どれだけ私を嬉しく思はせましたことか。」

時機が將に去らうとしてゐた。も少し経つと、彼れの美しい言葉の通り、ヴィオロンの來方が過ぎたであらう。」老大家は日増しに衰退してゐる。嘗てはあんなにも鋭かつた彼れの眼も、今は殆んど署名することさへ不可能で、その細かい文字が顫へ、こんぐらかり、分らないものとなつたほど曇つて了つた。彼れの筋肉は甚だ衰へて、もう夫人の腕に倚り、杖に身を靠せて、ほんに小さく刻んで歩くだけである。それにしても近かくに助けの腰掛でも無いならば、彼れは直き痛ましくも倒れて了ふのである。此のアルマ——彼れが三十年來毎日踏んで來た此のアルマを一週するとは、もう間もなく覺束なからう。斯うした全身の衰退の中にあつて、たゞ彼れの輝く二つの瞳孔と、彼れの異常な記憶とのみは、尙ほ生き／＼としてゐる。

それにしても、彼れはたゞ無限の倦怠を感じてゐるだけで、少しも悲哀に沈んでゐはしない。そして「昆蟲記」を彼れが欲した點まで突き進めて行かない限り、——此の世の光明が突如として彼れを去り、彼れの眼が永遠の生命に開かれるその瞬間までは、いつかな死なうとは思はない。

祝典は一九一〇年四月三日に行はれた。それは靜思の空氣と單純さによつて、實に感慨深いものだった。

ファブルの生涯に於て、何んと云ふ類ひなき日であつたか！

その朝、アルマの門は凡ての人に開かれた。そして屋敷へ襲ひ入つたセリニヤン衆の多くのものは、久しい間彼等の同郷人となつてゐる此の人を始めて發見し、始めてその顔を見て驚いた。

然しながら、凡ゆる方面から此の桃色の家の前に慕ひ集まつた崇拜者の群れの中で、最も驚いたのは、それはハンブルなものの中でもハンブルな盲目の指物師、マリユスだった。彼れは彼れが愛慕する人のために斯くも突然撒かれた多くの讃辭を聞いて、胸中を揺がす激しい歡喜を抑へることが出来なかつた。それほど斯うした禮讚の日が、彼れに取つては曾つて聞かうとは思はれなかつたのだ！

のだ！

祝典の日はずつと前から取り決められてゐたにも拘はらず、一として不安でないものは無かつた。

第一、此の祝ひの式に参加することになつてゐた名士の間には、先きの意見が變はりかけてゐた。そして此の科學者の祝典に、科學者のやつて來たものは殆んどなかつた。

それにしても、彼等は王侯の凡ゆる豪奢を以つて祝された、より盛大な他の祝典の壯麗に心を惹かれて、極めて近く、地中海岸の一點に多勢集つてゐたのだ。即ち此の瞬間に科學界の一部が異様な對照をなして、モナコ王が巨萬の資を投じて設立した海洋生物館の開館式に伴ふ美々しい光景を味はうために、あの南方へ移つてゐたのである。それは「吾々の大西洋岸や地中海岸に、幾多の實驗場が大費用をかけて建設せられ、小さい海の生き物は解剖せられ、強度の顯微鏡や、纖巧な解剖器や、捕獲器や、船や、漁夫や、養魚器などに惜し氣もなく金をかけられ、」そしてファブルが何處かで熱烈な言葉を以つて、生命の深い研究のためには必ずしも必要でないと思つてゐる所の、さうした研究所の白眉とも云ふべきものなのだ！

フランスの科學者たちは、歐米の多數のアカデミイの代表者等と共に、海祭りの亂舞がサン・サ

エンの刺戟の強い音楽と交替するさうした崇拜氣分に現を抜かして、最早たゞの一分たりとも彼等の眼を此の「光明の君」、此の「有徳の君」、此の「有用の君」から外らすことは出来ず、そしてそのまま、巴里上りの途に就いて、彼等の大部分はオランヂュとみすばらしいセリニヤンの村をば顧みなかつた。

それに、天氣も此の季節としては甚だしく悪かつた。此の春は始めから洪水や、その他色々の惨害に満ちてゐた。そして巴里では、世も終りかと思はれたほど雨が降つた。

それにしても幾日かの雨が此の日降り止んだ。そして突如として太陽が輝いた。

多くの讃辭の間に、金の記念章が老人に捧呈された。それには卓越せる彫刻家シカアル (Sicard) に依つて、一面に彼れの特徴が稀れに見る忠實さを以つて彫りつけられてゐた。その裏には美術史にも稀れな美しい綜合の裡に、科學者と昆蟲の詩人と、同時に、闇の底から多くの小さい生命が忽然と現示せられた景色と、太陽を浴びたヴァントウ山に面して橄欖樹に取り巻かれた奇蹟的な村とが、巧みに掴まれて驚くべき寓意に輝いてゐた。

ストックホルムの科學院は、此の機會に彼れに最高の表彰を呈した。そのリンネのメダルを私が捧呈する光榮を持つた。

俄か拵への祝宴が、セリニヤンのカフェで張られた。それは恐らく斯うした田舎の慎ましやかな生活の中では、光榮さへが慎ましやかにせられるためであらう。

フアブルは歩くことが出来なかつたので、オランヂュからわざわざやつて來た盛裝の馬車へ、手傳つて乗せられなければならなかつた。そして小さい行列はマリユスに元氣づけられた村の音楽隊と共に、一本街を揚々と練つて行つた。

それは家族の一大饗宴——凡てが同じ思ひに溶け合ふあの愛餐のやうなものだつた。

エドモン・ペリエ (Edmond Perrier) は此の老博物學者へ學士院團の讃辭を齎らした。彼れは飾りの無い言葉を以つて、彼れ自らの正しい感謝を巧みに云ひ表はした。そしてフアブルの全經歷と、その不朽の著作との要領を語つたのは、一層博物學者を頌讚するに適したものだつた。

勞苦の過去を呼び起こす之れ等の言葉に、フアブルはその果敢なくも消え去つた悦び、彼れの生涯の幸ひなりし唯一の數分」をそゞろに懐かしんだ。そして自らの想ひ出と、今斯うして彼れの天

才に献げられる單純な、敬虔な讃辭とに感極まつて、彼れは潜然として泣いた。多くの人々も、彼れの泣くのを見て涙を流した。

無名の大衆の名を以つて——彼れの著作の中に無限の愉悅を見出した凡ての人達の名を以つて、讃辭を述べた人もある。また偉大なる文學者、偉大なる詩人から、此の日此の時、此の「昆蟲のヴイルヂイル」へ——「野の蟲けらの言葉を知つてゐる此の優しい道士」へ、彼等の敬意、彼等の雄辯な言葉を贈つて來た。

註一 エドモン・ロスタン。

「事情に妨げられて、遺憾ながら私は参加することが出来ません。然しながら私の真心は、この感歎すべき人を、このフランスの至純な光榮の一つを、私がその著作を讚美して止まない此の偉大な科學者を、香り高く意味深い此の詩人を、吾々をして草の中に跪かせた此の昆蟲のヴイルヂイルを、睿智の最もよき實例を示した此の隱者を、セリニヤンをメエヤヌの對とした、此の黒のフェルト朝を被つた高貴な人物を、今日其處で祝ふて居られる皆様と共にあります。」

此處で私が云つて置くべきことは、即ち、エドモン・ロスタンは常にフアブルの崇拜者の一人、特にフアブルの遺境の友であつて、機會ある毎に、必ず配慮と心からの感歎を表明して來たと云ふことである。

註二 ロマン・ロラン。

それは實際、彼れは早晩十分に認められたことであらう。それにしても斯うした催しが無かつたならば、彼れの生涯の終りは確かに忘却の裡に過ぎて、殆んど注意を喚起することもなく、そのまま寂しく此の世を去つたであらう。そして村の墓地となつてゐる砂利地の中へ——彼れに先き立つた愛する者どもの待つてゐる墓所の中へ、葬ふ者もなく空しく去つたであらう。

然しながら、彼れに致された榮譽も、彼れが當然受くべき榮譽を去ること未だ遠いものだつた。教育界はフアブルがその光榮の一つだつたにも拘はらず、此の盛典に光彩を添へることをしなかつた。また政府が當時忙殺されてゐて、何人も期待してゐたやうに自發的にかうした記念すべき場合にふさはしい行動を執ることが出来なかつたのは、返へす／＼も遺憾である。デュリュイがフアブルを帝國のシュヴァリエ (Chevalier レゾオン・ドンヌウルを受けた人) となしてから、既に四十有餘年經つてゐる。而かも此の永い間に、何人も進んで當局に彼れを想起させ、彼れの價値を辯明し、彼れの功勞を立證し、以つて彼れのレゾオン・ドンヌウルを一級進ませようとした者はなかつたの

た。それにしても、彼れは絶えず多くの卓越せる勤勞を以つて、此の勳章に一段の光彩を添へたではないか。

かうした遍播きの報償も、彼れの生涯の黄昏時を輝かせるだけの効果はあつた。何んとなれば、此の瞬間から突如として彼れの眞の姿が輝き、そして偉人の間にその席を取つたからである。

遂にフアブルは名聲と光榮とを知つた。否、そればかりではない。衆望をも聚めた。それは當然だつた。彼れは本質に於て民衆の天才ではないか。彼れは永い生涯の間、生命の不思議を萬民の掌中に置くことに努めたではないか。彼れが著作をしたのは、特に平民の子供等のためではないか。かくして世人はアルマの道を知つた。今、人々は群れをなして、此のアルマと、此の慎ましやかな實驗室とを訪ねて来る——恰かも眞の順禮地へ、熱烈な信者が遠方から引きつけられて行くやうに……

つい此の間迄は、あんなにも多忙だつた彼れの生活は、今や大部分さうした訪問に満たされる。そして彼れに注がれる斯うした同情の温かさの中で、彼れの感ずるのは黄昏ではなくて、それは曙

である。恐らくまた斯うも感じたであらう——生涯の努力は無駄ではなかつた。自分の著作に依つて、多くの人々は植物や動物を一層愛しみの眼を以つて見るやうになるであらう。また、自分の著作へ漸く向けられた人々の考察も、これを忽ち汲み盡くすことは出来なからう——と。蓋し、彼れの著作は自然の聖書の一なのだ。

光榮の晒臺

彼れは國家の一大人物となりつゝあつた。今や彼れには財産も出來て來た。凡ての人は彼れを讀み出した。何人も彼れを知つてゐるやうに見せたがつた。そして「フアブルの日」が祝はれた年だけでも「昆蟲記」が二十年間にぼつり／＼とはけたよりも多く賣れた。然しながら、彼れにはもう嚙む齒も、見る眼も、歩く脚もなくならうとしてゐた。そして彼れはもう仕事をすることは出來なくなつてゐた。

かうした人が何處かに居つたこと、斯うしたつゝまじやかな博物學者が世界の大博物學者の間に伍する價值のあつたこと、彼れが小さな村の中で、荒漠たる自然に取り巻かれて、寔に驚嘆すべき觀察をなしてゐたこと、そして彼れがそれらの觀察を、正確と單純とのモデルとして、また事物から發出するあの自づからなる詩味の最高表現の一として、幾世紀の後までも残るやうな靈妙な文體

を以つて描いてゐたこと——それが凡て突然に分つたので、多くの人は少なからず驚いた。

彼れが文學のノベル賞金に對して推薦せられたのも、さうした理由によるものである。そして、恐らく審査員をして彼れにます／＼好意を懐かせようと云ふ目的からであらう、彼れを尙ほ以前のやうに貧しいと思ふてゐた人達は、彼れの過ぎ去つた貧困を誇張し出した。彼れは殆んど赤貧で、將に餓死せんとしてゐるものやうに云はれさへもした。

かうした作り話は、ミストラルの響きのよい動議となつて現はれた。彼れは迂遠の靜謐の中に於て、かうした思ひ切つた噂を、彼れの光榮ある名前を以つて公證しなければならぬと考へたのだ。それが又ロスタンの堂々たる詩となつて表はれ、さうした噂に寛大な息を吹き込んだ。

フランスよ 莊嚴な崗が或ひは崩れようとする時に

お前はスキーデンの爲種に望みを置くか

お前はフアブルの老衰を知らない筈はない

またお前が當然彼れに爲すべきことを爲さなかつたことをも

「昆蟲のフアブル」——ロスタン

全世界は動かされた。限りなき憐愍の澎湃たる浪がセリニヤンに向つて押し寄せた。そして無數の施物が一と夏の間、此の覺えのない受取人を困惑せしめた。「老境にある自分にかうした途方もない事は止して貰ひたい、」そして最後の日を平穩の裡に了へさして貰ひたい——かう彼れは切願した。

註一 一九一二年、八月四日、マタン紙へ。フアブルから。

彼れがこんな風に公衆の前に晒され、そして彼れの貧困へこんなにも光彩を與へられたことを、如何に惱んだかは想像に餘りある。幾束もの爲替、否、物品さへがフランスの隅々から送られた。大金を呈供した未知の友さへもある。然しながら、彼れにとつて最も堪へ難いのは、もつとも不面目なのは、それは外國人の施物だつた。三フランの端た金が嘲笑の意味でブルシアの奥から彼れに送られた。そしてベルリンの一新聞は大膽にもかう書いた——「フランスが光榮の負債を拂はないならば、ドイツはこれを支拂ふ。」

物語にでもありさうな清廉さを以つて、フアブルは毎日々々さうした無数の手紙に答へ、さうした金を返送し、またさうした「意地穢い人いぢめ」に對して抗議を申し込んだ。無名の賜物はセリニヤンの貧民に分られた。

註一「吾々の敬愛するフアブルは、彼れの許へ送られる金品を、一切寄贈者へ返送すると申しました。その結果、彼れに宛てて私へ送られた一千フラン近くの金を、私自身もそれ／＼發送者へ説明をつけて送り返へすために、随分多忙でした。」(ミストラルから私への手紙。一九一二年、七月三十一日)

無数の同情深い人の間には、人間性のどん底を此の場合にさらけ出した下劣な者もあつた。それがフアブルをして、常に下等な蟲けらの間に悲しくも認められた所の、あゝした矛盾を感じしめた。即ち、何んともつかない動物が彼れの隱遁生活の只中へ幾つも立ち現はれて、圖々しくも彼れに勸むるに斯うした施物の山の藪くも一部を取つて置くべきであることを以つてした。その下心は實に奴等自身の必要を充たし、その包み隠くしてゐる貧困を密かに和らげようとするにあつたのだ。さ

うした動物の一は秘密を守つて貰ひたいと頼みながら、彼れに斯う云ふ手紙を送つてゐる——「法王を御覽なさい。彼れは凡ゆる志を受けて、それを世界の到る所に配るではありませんか！」

それにしても斯うした虚偽の力に驅られて、政府はいよ／＼彼れに補助金を給することに決定した。フアブルがそれを未だ給せられてゐなかつたと云ふことは、外國では奇怪に思はれた。それは二千フランだつた。二世紀以前レオミュールが給せられた一萬二千リーヴルと較ぶれば、何んと云ふ吝な額であるか。而かもレオミュールは大して必要に迫られてはゐなかつた。のみならず、科學者としてのフアブルは、何も彼れに劣つてはゐないのだ。成程當時の彼れの物的位置は最早不安でなかつたにしても、實に長い間彼れはパンを得るために、その家族を養ふために、驚くべき激烈な仕事をしなければならなかつたではないか。而かもこれに依つて彼れの科學的探究が、どんなに打撃を蒙つたことか。されば尠くも二十年以前に於て、彼れが既に凡ゆる物質上の憂苦から解放せられたなかつたことは、返へす／＼も遺憾なことである。

註一 ミストラルから私への手紙。

「終りのよいものは凡てよい。そして今、終りがよいのです。博物學の長老が、とうとう二千フランの補助金を給せられるではありませんか……」

註二 「フアブルに對して、國家から年金若しくは補助金を支出させることは出來ないのですか。生涯の偉業によつてフアブルは祖國の名譽となつてゐるではありませんか。ですから彼れの偉大な祖國は、あんなにも著名な、あんなにも清廉な、あんなにも高貴な科學者の老境を保證すべき義務がある様に私には思はれます。」 ストックホルムの科學院の幹事 Aurivillius より私への手紙。(一九一〇年、十月六日)

それにも拘はらず、彼れを繞つてあんなにも出鱈目に流布せられた作り話は、その結果、ますます彼れの人氣を増すことになつた。それを誰れよりも先きに彼れ自身が、その古いパイプの煙の輪に較べて笑つてゐた。

然しながら、さうした人氣も科學院の門戸を開くには至らなかつた。恰度その頃法令によつて、科學院内に新しい一部が増設せられ、その部員は全く通信員の間から選ばれた。それは地方に愛著して居りながら、屢ミフランス科學の名聲に素晴らしい貢獻をした多くの科學者に對してなされた敬意であつた。ところでフアブルは、當時さうした科學者の最も代表的なものの中でも、第一位に

在つた。然しながら、「吾々と不斷に接觸して居つて、測り知ることの出來ない價值ある研究資料を一般心理學へ供給し、乃至は、吾々の收穫を荒らして國富を危險に曝す地上の小さい蟲けら」をば蔑すんで「アルコール漬けの」死んだ昆蟲へのみ注目する動物學者どもは、いやはや、實に巧妙に謀んで彼れを押し除けたのだ。

實際、三十年前を振り返へつても、彼れはフランス學士院團の綠衣を着け、羽飾りのついたシャツボを戴き、そして眞珠母の握りのついた劍を佩びたことはない。

然るにアルマを訪づれる者は、もう絶えることはなかつた。彼等は一人々々、若しくは小さい群れをなしてやつて來た。彼れは常に無限の好意を以つて彼等を迎へ、しんみりと會話をとり交はしては喜んだ。

それは實際、彼れを骨董品か何んかのやうに心得て、單に見に來た者もある。然しながら、さうした人々の間にさへも、歸つて行く時にその見たところのものに感激して、今までよりも多くのものを考へ、牧草地の花をよりいぢらしく思ひ、森や林に漂ふ野生の匂ひをよりしんみりと感じ、又

草木の縁もより柔いやうに思ふものもある。彼等は大地を見、「草の中に跪く」ことを學んだのだ。幾多の科學者が、此の科學者と語りに来る。また或る者は、此の師範學校出、此の宗派に屬しない教員、此の偉大な教育家に敬意を表しに来る。彼れの光榮は凡ゆる小學校の光榮なのだ。

直接に訪問することの出来ない人々は、彼れに手紙を送つて、彼れに負ふところの凡ゆる愉悅を語り、彼れの物語を読んで過した永い嬉しい時間を謝し、「昆蟲記」の續きを限りなく與へて貰ふために、何時までも健在ならんことを希望する。

或ひは彼れへ「昆蟲記」、若しくは哲學に關する多くの質問をかけるものもある。或ひは彼れが掲げた或る峻るやうな神祕な問題に就いて、不可能な解答を求めものもある。さうかと思ふと、胸に蟠かまる切ない思ひを聞いて貰ふために、彼れの許にやつて来る婦人もある。これこそは純眞な頌徳とも云ふべきもので、他のいづれにも増して人の心を動かすものがある。それは一人ぼつちな寂しい人々にとつて、彼れの著作が何んと云ふ功徳となつてゐたかを物語るものである。それはまた、靈妙な科學に巧みな通譯者の聲さへあるならば、それがどんな慰藉となることが出来るかを語るものである。

或る者などは、彼れにそのへば文章、へば詩を聽いて貰ひにやつて來た。そんな時には彼れは大して耳を傾けるでもなく、たゞ一刻も早く免れるために、「よし／＼」と云ふもののやうだつた。

黒のボヘミアン・ネクタイをつけ、窮屈な燕尾服にくるまつた、顔の蒼白いバレス (Barres) 流の耽美主義者などもやつて來て、神聖な靜寂の多産な靈感を云々したりした。

旅役者さへがプロヴァンスを打つて歩く序でにセリニヤンに乗り込んで、彼れに敬意を表さうと云ふつもりか、それとも彼れに褒められようと思ふつもりか、何んか有名な堂々たる詩を朗誦したりした。一度び靜寂の中に歸つてから、未だが／＼云ふ記憶の新しいうちに、その印象を訊ねられると、彼れは何が何んだか分からず、たゞ底の知れない退屈を感じたことを、きつぱりと云ふのであつた。

また、彼れがあんなにも永い間暗がりに放棄せられてゐたことを驚く人々に對しては、彼れはかう答へるのであつた。

「光榮のために働いたのではなく、たゞ／＼仕事が面白くて働いたのだから、わしが顧みられなか

つたからと云つて、あなたは憤りなさるが、わしは別に何んとも思ふてゐない。」

然しながら、群集が屢々遠慮會釋もなく彼れの住居を襲ひ、花壇を踏み蹂り、緑の灌木へ傷をつけ、此の聖地に於いて不謹慎な、劣等な振舞をしたには、彼れは何よりも不快に思ふてゐた。既に「ファブルの日」の祝ひの時に、ミストラルが彼れのためにさうした事の心配をして、私にかう云つた。「彼れが靜かに隠退して居られるのを、こんなに群集が押し寄せたんでは、ちと彼れを亂し、彼れを疲らしはしないでせうか。かうした歳になると、平和ほど嬉しく尊いものはないですからね。 *Parva domus, magna quies* 賢者と云ふ賢者は、みんな斯う申してゐます。」

然しながら、此の復活の日以來恰も世人は彼れへ續けざまに、ミストラルへ五十年間に與へられたよりも、より多くの名譽を浴びせ掛けようとするものの如く、何々大學教授、何々委員、何々協會員、何々アカデミー員など、群集はいよ／＼多く、ます／＼騒々しく相次いでやつて來た。單純な、慇懃な一大臣も屬僚の一行を伴ふて來て、ファブルに眞摯な言葉を云つた。彼れは偉大なデュリュイ以來五十年、ファブルを訪づれた唯一の大臣だつた。

註一 一九一三年八月五日、大臣ジョゼフ・ティエリイ (Joseph Thierry) の訪問。

村の臼砲がさうした訪問の序曲を奏し、セリニヤンとオランヂユとの音楽隊がこれに伴ふ。その度び老人は玄關から遠くない築山の上で、藁張りの椅子、若しくは平常彼れの好いてゐた腰掛へ掛けさせられる。彼れの頂は大きな新しいフェルト帽に蔽はれ、丁寧に梳かれた長い白髪は垂れ、軟らかい開いたカラーの下には、黒い絹のネクタイがぞんざいに結ばれ、胸の上につけられた赤い略綬は黒地の上に輝く。彼れはちつとして身動きもせず、ちつちやくなつて待ち、且つ聽く。然しながら、もう悟道に入つた、それでも何んとはなしに不安な此の晩年に於て、彼れはさうした何ものにも興味を覺ゆるではなく、親しい人達に向つて、よく自分は「珍らしい動物」なんだ、皆んなが話し、皆んなが見たがる「奇妙な動物」なんだと云ふのであつた。

えらく準備された挨拶に對して答へることは出來ず、彼れは黙つてゐるか、さもなければ泣くのであつた。そんな譯で、彼れは阿呆にでもなつたやうに思はれた。彼れを知らずに讚美してゐた多くの人達は、遠くから想像してゐた理想の姿が忽然として消え、そして幻滅の苦い味を味はうよりは寧ろ近寄つて見ない方がよいなどと考へた。

家に這入ると彼れは、シヤラツスやアンフオス・マルタンなぞとしんみり打ち解けて、はじめて
綾つくりするのであつた。彼れはこれらの純朴な、健全な、教養のある人達を非常に懐しんで
た。彼等はまた誰れにも増して「さら／＼した不斷着、がつしりした地味な靴、太地の木綿のシヤ
ツ——何よりも彼れの類ひなき心」を愛してゐた。

註一 Anfos Martin 始め小學教員で、後に福學官となつた人。

かうした讚美は最後に一九一三年の秋、大統領ポアンカレの訪問となつて現はれた。その朝、輝
かしい南フランスの光りの中を、彼れは地方の古曲を奏する笛や太鼓の音と共に、花薫るメエヤ
ヌにミストラルへ敬意を表しに行つた。ミストラルがその靈妙な詩を以つて吾々の光りを失つた想
像を照らし、晨の息吹のやうに新鮮な忘れることの出来ない幾多の節を以つて、吾々の想ひ出の中
へミレイユ (Mireille) とカラランダ (Calendal) との不朽の姿を打ち起して呉れたことを、彼れは全
國民の名に依つて感謝するために行つたのである。

註一 一九一三年、十月十四日、大統領ポアンカレの訪問。

そして夕暮れ近く、何んと云ふ感動的な對照であらう、恰度陽も沈まうとする頃に、彼れは今度
セリニヤンの偉大な隱遁者へ共和國の讚辭を齎さうとしてゐた。幾つかの緑門は、埃だらけな街道
に跨つて、最後の夕陽に輝かされてゐた。軍隊は所々に配置せられ、街道に沿う土手は無数の群集
によつて蔽はれてゐた。そして幾人かの憲兵は、アルマの凡ゆる隅々を偵察し、警戒してゐた。

彼れは樹の葉のテントの下に運ばれた。そして彼れの家族、甥、それから母が死んで幾許も經た
ず、尙ほ喪服を着けてゐた彼れの娘達はそのぐるりを取り巻いた。彼れの直ぐ傍らには、今彼れを
介抱してゐた尼さんが付き添ふてゐた。

彼れの前には三色旗がなびく門の所まで、青々とした生垣に縁取られた路が、綺麗に搔かれて眞
直に展べられてゐた。

突然、音楽が濕めやかな大氣の中に響いた。一行が現はれる。華やかに進んで来る。そして大統
領は「微々たるものの中に偉大なるものを見せ、そして吾々に無限の感じを與へる」所の、此の崇
高な百姓へ口早に言葉をかけた。

ファブルは無言のまゝ聽いてゐた。彼れの言葉に餘る感情を表はすものといへば、たゞ顎が痙攣

的に頼へ、しばたゞく臉の赤い眼からは涙が溢れて、靜かに皺を傳ひ落ちる位のものだつた。彼れは腰掛から身を起して應へようとした。が、四方から差し出される手を握ることが出来た丈けである。重々しい沈黙が次いだ。そして次第に人の去つた庭は、夕べの薄明りと涼氣とに包まれた。

今になつては如何なる名聲も、彼れに不釣合ではないやうに思はれた。そして人々は尙ほ生きてゐる彼れを石に刻み、銅に鑄ることを考へた。實際多くの偉人は屢々數世紀を待つて始めて肖像を持ち、そして通行人にその天才若しくは徳を回想せしめる。然るにミストラルのそれは、既に誇らかにアルルの古代劇場に聳えてゐたではないか。それにしても今、フアブルの光榮を望んで止まな人々には、たゞ一つでは満足が出来ぬ。そして彫刻家の鑿は、やがてアヴィニオン、オランヂユ、セリニヤン、及びサン・レオンに建てらるべき像を、或ひは始め或ひは終るために、互に熱烈な競争をしてゐた。彼れ自身はどうかと云へば、さうした凡ての異常な準備を、それとは定かならぬ好奇心と深い無關心とを以つて見てゐた。「わしの考へでは、これはまあ、お祭り騒ぎだね」——斯うフロンテニヤン市から美味い葡萄酒を送つて呉れた友人ボルドオヌへ書いてゐる。

註一「セリニヤンの市長は、わしのために半身像を建てる計畫中だとのことだ。恰度今、わしの家には彫

刻家シャルパンチエが來る。そしてアヴィニヨンの師範學校へ建てようと云ふ像を造つてゐる。わしの考へでは、これはまあ、お祭り騒ぎだね。皆んなはしたい放題なことをするがよい！ わしと漆木日には、ます／＼老けた。もうお終ひだ！」（一九一三年、九月十五日、醫師ボルドオヌへの手紙）

戦争がぐん／＼と大股にやつて來て、凡ゆる斯うした過度の熱心を阻止した。そして老人は尙ほ幾らかの餘生を、再び聖い静けさの中に樂しむことが出来た。

小秘密の後の大秘密

大嵐のやうな怖るべき戦争が、自然の面を認知の出来ないものとなしながら、遮二無二、道なき道押し分けて来た。そして、世界を司どる必然的な経済法則の一作用であるかの如く、彼れは今また猛威を逞しうする——「貧者が富者を妬む」やうな、また、人間の森林に「狼が潜む限り、モロツス犬が必要である」やうな、此の宏大な社会組織を左右するところの、あの本能の放たれた衝動の如く宿命的に——。

久しい以前から豫言せられ、豫期せられ、そして萬人を不安ならしめてゐたところの、あの中歐に蟠踞してゐる「掠奪者」の不斷の威嚇が、日に増し明瞭になつて、既に勇敢な蠅のセルビアをその網に引つけてゐた。そして此の「掠奪者」は、ファブルがあんなにも屢々云つたやうに、ひたすら正當な所有者を惨殺し、その住所と、その仕事と、その富とを破壊することをのみ思ひ、世紀

の経験も教ふる所のない因習的な敵の前にあつてさへも、何んら不安を懐くことのない昆虫のやうな、全く無關心な此の吾々をも將に襲はんとしてゐた。

世界を動搖させてゐた擾亂は、フアブルの住居さへも揺がした。彼の女婿、彼れの息子は戦線にゐた。此の後者が出發する時に涙を流すのを見たフアブルは、渾身に力を籠めて、その涙を拭へ、男兒として義務を果せ——と嚴命したのであつた。

休暇を得て、若しくは負傷して保養のために歸つて來る村の軍人に、彼れは何やかやと食るやうに訊ねた。彼れは釣り込まれるやうにして彼等の物語を聴き、彼等に葡萄酒をすゝめ、彼等を鼓舞し、彼等へドイツ人に對する彼れの憎惡を吹き込み、同時に彼れに充ち満ちてゐた無限の希望を彼等へ感染させた。實際彼れに取つてドイツ人は、考へ方なり表現の仕方なりの點で、彼れとは餘りに縁が遠く思はれて、その著作をドイツ語に翻譯させようとはしなかつたほどである。吾々の軍隊が戦つてゐるのは實に祖國の福祉のためのみではなくて、それはまた吾々の道徳的解放、科學的獨立、彼れ自身も常に力を致して來た吾々の智的復活のためであることを、彼れは切實に感じてゐた。

然しながら、彼れは間もなくアグラエと尼さんとの懇ろな介抱に取り巻かれて、彼れの部屋に閉ぢ籠るやうになつた。何時もの小さい卓子の前に坐つて、彼れは尙ほも思索しようとする。あゝ！此の卓子はやがて彼れの宏大な刻苦精勵の形見、彼れの最後の證人となるものである。彼れは鼠色の羅紗の部屋衣を纏ひ、草色の天鵞絨の頭巾を被り、そして股の半ばあたりまでも届くメルトンのゲートルは、びつちりとぼたんをかけられてゐた。彼れを見違ひさせるやうな、斯うした異様な身装は、彼れの身邊を有らん限りの心盡くしを以つて取り巻く孫娘の思ひつきだつた。そして彼れは彼女の親切さ、惻愍さ、快活さなどを極めて嬉しく思ふてゐた。彼女はまた彼れにバイブを詰め變へてやつたり、相變らず澤山來る手紙へ口述によつて返事を代書したり、また彼れの欲するまゝに福音書を読んでやつたりもした。キリストとエンマウスの弟子等との邂逅は、彼れが特に好いたエピソードの一つだつた。彼れの所謂「斧を振つて刻む使徒」なる聖ポオルの氣高い姿も、「商賣の非凡な酒屋」のそれと共に、彼れに深い印象を與へてゐた。舊約全書の第一書もよく読んで貰つた。特に創世記の始めの方などは、その整然たる壯麗さが、彼れを恍惚たらしめるのであつた。

さうかうしてゐる内に、彼れはどんなことをしても、ますます睡魔を打ち拂ふことが出来なくなつた。それが晝の大部分、彼れを抵抗の出来ないやうに襲ふやうになつた。私が何時もして来たやうに、それが最後となつたがノエルの日に訪ねた時、さうした不可抗の傾向と闘ふためにコーヒを執ることをお奨めした。彼れはにこ／＼しながら、たゞかう答へただけである。

「山羊がコーヒの葉を食つたら睡られなくなつて、しよつちゆう踊つてばかりゐたつてことだ。知つての通り、それがコーヒの發見となつて、その結果素晴らしい富となつたのだが、それでは何かね、わしもその山羊みたいにびよん／＼跳ぶ見込みでもあるのかね。」

私は彼れの眼を覺まさせてやるために、爐に燃えてゐた焰から紙を振つたものへ火を點けて、彼れが絶えずそのまゝ消やして了ふパイプへ火を點けてやつた。と、彼れはかう思ひ耽つた。

「今でこそ此の火のことは誰れも何んとも思つてゐないが、いちらしい人類ヒトがそれをものにして絶やさないために、どれほど永くかゝつたことであらう。それを思ふてみたことがあるかね。わしの子供の時分子供の時分でさへも、村の媪さん達は毎朝隣から隣へ往つて、灰を被つてゐる火種を貰つて來、そ

して火をおこして爐を復活させてゐた。」

身體があんなに衰頹してゐたにも拘はらず、彼れの頭腦だけは依然として驚くべきほど明晰だつた。そして彼れには意味が取れなからうと思はれるやうな、端端でこそ／＼する啞啞きをさへも、彼れはちやんと聞いてゐた。

再び五月の月になつた時、彼れはもう一度リラの花盛りなアルマをひと廻りしようと云つた。そこで人々は彼れを椅子車に乗せて、婉りくねつた小徑を押して行つた。

前年の夏以來、もう、何んと云ふ變り方だ！ 幾許も經つてゐないのに、もう、様子がすっかり變つて了つて、彼れ自身にも見當がつかないほどではないか！ すさまじい勢ひの植物は、彼れが手入れをしなくなつてから、既に人間の事業を絶滅しようとしてゐた。特に日本の漆——あの邊りかまはず蔓はげの標しるしが花壇へ踏み込んで、所によつては四輪馬車さへ通れる廣い路をも襲ひ、今では到る所、たゞもう抜き足差し足の細い跡しか出來てゐないのだ。間もなく彼れを奪ひ去らうとしてゐる死の未だ到らない前に、先づ彼れの物が死んでゐた。

それにしても、死は秋の半ばまではやつて来なかつた。とは云へ、それまでに尿毒症の危機が數回、これが最後ではないかと氣遣はせた。とう／＼十月七日に極めて危険な危機が、完全な閉尿を伴つて、それが約四十八時間続いた。此の時からと云ふものは、彼れは屢々人事不省に陥つた。けれども醒めると元の明晰さを恢復して、彼れは妹と親しく語り合ふのだつた。十一日になつて、彼れはきつぱりと最後の苦悶をし出した。セリニヤンの牧師が謝罪の式を行つた時、彼れはもう意識を失つてゐた。それにしても牧師の強い聲を聞きつけ、彼れは昏睡から醒めて、その大きな眼を彼れへ向けた。牧師は彼れに聖膏禮を受けるかどうか、受けるならば、その徴しるしに握手をして下さいと云つた。此の瀕死の人は握手の手つきをした。だから彼れは、その昔ロデエの中學校で、授業料を拂ふために彌撒のお手傳ひをした頃以來、始めて立派な基督教信者となつて此の世を去つた。

それに彼れは生涯を通じて、誠意を以つて「最高理性」と接觸してゐたではないか。研究することは、彼れにとつて、常に最上の祈禱であつた。そして彼れ自身の定義によると、科學は闇を拂ふ

祈りの最も優れたものだつた。尙ほ彼れは、彼れの愛慕する詩人ベランヂエの「善良な神」を心から信じてゐた。

吾れは選ぶ、心優しき者を。

— Le Bon Dieu

また、彼れの心はその魂のやうに豊かであつて、惱めるものに對しても、貧しき者に對しても、榮えなきものに對しても——凡てに微笑み、凡てに開かれてゐた。よしんば信念によつて、生涯宗派に屬しない自由な教育を固執したに拘はらず、彼れは凡ての信仰に對して常に深い尊敬を拂つてゐた。セリニヤンの學校から信者の女教員等が追ひ拂はれた時、彼れは彼等を熱烈に辯護した一人である。彼れはまた、彼れの教區の非宗教的な小學校へ常に寄附をした。だから凡ゆる教會は彼れを己れのものとなし、彼れのために祈禱を捧げたやうな譯である。本當を云へば、彼れは信仰を持つてはゐなかつた。然しながら、彼れはさうした嚴肅なことに關し、冷淡も狐疑も許しはしなかつ

た。彼れの神と云ふ觀念は、科學的の信念に基いてゐた。そして彼れが全自然の中に見てゐた所のものは、それのたしかな保證だつた。

彼れは莢蒾の花輪を以つて飾られた小さい鐵の寢臺へ横たへられた。彼れが絶えず被つてゐた古い黒のフェルト帽は、彼れの傍らに置かれた。そして兩手は黒檀の十字架の上に組まれた。それから彼れは、例の見榮えのしない客間に降ろされた。それは彼れを柩へ納めるために、燈明の輝く葬ひの間とされたのであつた。彼れは其處で葬式の時刻まで、ブルーエール、その他アルマの色々な草花をこき混ぜた花冠に取り巻かれ、顔はそのまゝ蔽はれずにゐた。さうしてゐる間、凡ての人は曾つて無かつたほど印象深く美しい此の顔の驚くべき清澄さと、異常な純潔さにつく／＼見とれた。それは死ぬことのないと云はれる黄金時代の傳説の、あゝした禁慾主義者、若しくは聖者の身體のやうに、何時までも／＼變はるべからざるものやうに思はれた。

その頃戦争の局面は、極めて氣遣はしいものだつた。吾々の敵はセルビアを侵略し、コンスタン

チノーブルへの道を切つてゐた。限りなき不安が凡ての人の心を惱ましてゐた。世界を擧げての憂亂の中で、フアブルの暴息して何れだけの重きをなしたのであるか。尠くも彼れが無類の通解者となつて來た自然は、彼れのために晴れやかな装ひをした。そして彼れが此の陰慘な時に於ても尙ほ家族の心を籠めた柩車に乗つて、あの懐かしいリラの路を去つたのは、實にイタリイ晴れの輝く日であつた。惜むらくはミストラルがせられたやうに、彼れもセリニヤンの青年中、尙ほ生き残つてゐる者の腕を以つて運ばれなかつたことなる。

青葉と草花とに薫る柩に次いで——四人の村會議員が支へた弔布に次いで——共和國の政府を代表した知事の、立派な刺繡が太陽に輝く禮服に次いで——セリニヤンを繞る凡ゆる地方の歩くこととの出來るものは、すべて此の感慨深い葬列に加はつた。それが少時教會に立ち止つた。そして凡ゆる葬儀の美々しさが展開された。それから、柩は山に近く橄欖樹にとりまかれ、野生の花と昆蟲の囁きに充ちた小さい墓場へしづ／＼と辿つて行つた。

弔辭が十有餘もあつた。特にシャラツスの別れの言葉は香のやうに——斷腸の祈りのやうに空へ昇つた。人々が入り代り立ち代り讚辭を述べてゐる間に、青い翅のばつたが幾つか柩の上へ來て止

つた。其處には既に、一匹のてんとう蟲が縋りついてゐた。乾いた草の香ばしい間を蟋蟀が縫ふて、行く／＼かさこそと音を立てた。と見ると、墓穴の黒い翹の中の灰色な石の上には、信心深い一匹のお祈り蟋蟀が止つてゐた。あゝ！かうして彼れに愛せられた凡ての蟲けらどもが、それ／＼藪の中、若しくは砂地の底からやつて来て、永遠の間彼れの方までも彼れの生涯の夢をばぐ／＼んで行くために、さながら彼れの跡を追はんとするものやうだつた。

——(終り)——



昭和十一年一月十三日印刷
昭昭十一年一月十七日發行

【フアブルの一生】
『定價壹圓』

11. 1. 14



製復許不

譯者	椎名 其二
發行者	西村 豊吉 東京市麹町區九段四丁目八番地
印刷者	櫻井 伊勢太郎 東京市神田區神保町二丁目四二番地

刷印社平太

御申込次第
新目錄贈呈

發行所

東京市町區九段四丁目八番地

叢文閣

振替東京四二八八九番
電話九段33二五六八番

叢文閣發行書目

ラレンチエフ共著 大戦後の國際對立	定價・〇〇 送料・〇六	エイアマン監輯 近代科學と戰爭の發達	定價・〇〇 送料・〇六	バーム・ダット著 フアシズム論	定價・二・八〇 送料・三三	プロゴジン オストロヴィチン フ著 社會構成論	定價・一・五〇 送料・二四	プレーゲル著 再生産論	定價・二・〇〇 送料・二六	カウツキ ルタセンブルグ著 恐慌論	定價・一・〇〇 送料・二〇	鈴木安藏著 日本憲法史研究	定價・一・〇〇 送料・二三	信夫清三郎著 陸奥外交	定價・三・五〇 送料・三三
----------------------	----------------	-----------------------	----------------	--------------------	------------------	----------------------------------	------------------	----------------	------------------	-------------------------	------------------	------------------	------------------	----------------	------------------

終



¥ 1.00